

〔資料紹介〕

石見亀井家文書

湯 浅 隆
小 島 道 裕

はじめに

歴博が所蔵する標記の文書は、外様大名亀井氏（因幡国鹿野城主・石見国津和野城主、大広間詰）に伝来した大名文書群で、当館で平成二年度および三年度に分割して、市中から購入したものである。史料としての点数は、六八一点（二九冊・七巻・四六七通・一七八枚）におよぶ。

これらの多くは、館蔵資料となる以前の時点で一定の規準により区分けされており、それぞれに箱に収納されたり表装されてまとめられている。今回の紹介にあたっては、従来の区分けを尊重し、あえて再整理はしなかった。このため、目録では文書が少なからず時代を前後して配列されているが、総点数からみても利用上の支障はないと思う。また目録は、現在の形状よりも個々の文書の作成時の形状を重視したものになっている。さらに、個別に標題を記述するにあたっては、記載事項にはかなりの精粗があるが、文書の概要を示すための目録としては目的を達す

ると考えている。

文書の大半は、織豊取立大名の近世初頭におけるありようの全般を示す内容をもつもので、史料として利用しうる範囲・事項は幅広い。統一政権との関係においては、政権への帰属、およびその命を受けた諸役員の負担、大坂の陣後の転封など、さらに諸大名間の応接の事項がきわめて具体的に明らかにする。また、家中の支配に関しては、藩主から藩重臣に宛てた治世向きの指示、藩財政の状態を示す所領・年貢勘定などが中心である。

なお、この文書は当初亀井家にあり、そのもとで近世のみならず明治年間に入っても修補の手が加えられつつ伝えられてきたと考えられる。状態ものの形状をもつ文書は、これらの時点で卷子あるいは掛幅に表装されたものが多い。したがって、保存状態はきわめて良好である。この一部は、『津和野町史』や『鳥取県史』編さんなどの過程でも利用され、また東京大学史料編纂所の影写本にもなっている。しかし、この文書群が亀井家の手を離れて歴博に至るまでの経緯は不明である。

この文書の目録作成、および簡単な解説について、「亀井家歴代宛古文書集」は小島道裕、それ以外のものは湯浅隆が担当した。

一 「亀井家歴代宛古文書集」

織豊期から一八世紀前半に至る亀井家の歴代当主へ中央政権から発給された文書およびそれに関わる文書で、もと黒漆塗りの箱二つに納めら

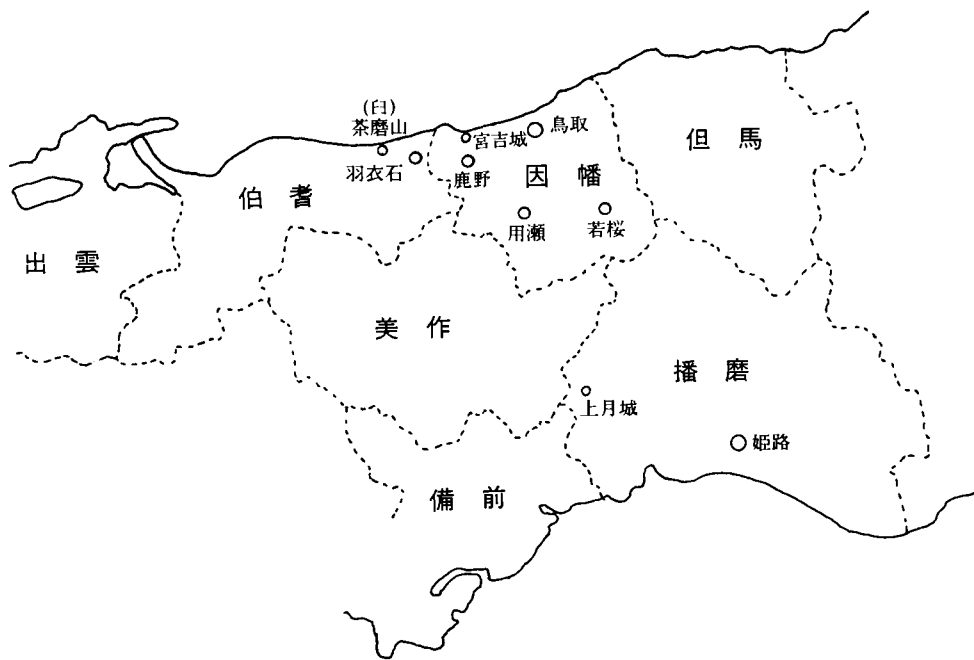


図1 因幡・伯耆の関係地名

れ、亀井家の由緒を直接示す重書として扱われていたものと思われる。現状は、近代以降の整理によって、一通あるいは一括ごとに封筒に入れられて番号が付されており、当面文書番号はこれに従っている。ただし、この番号は一応編年を原則としたらしいが、正確な編年順になっていない部分や明らかな年代比定の誤りも一部に見られるため、今回の目録では、試案として極力編年順に直した形で掲げている。なお、江戸期のものについては、多くが文書の由来等を記した包紙で包まれており、年代比定はこれによったものが多い。

全一六〇通の中で特に目を引くのは、四一通にのぼる秀吉発給文書をはじめとする織豊期の文書で、これらについては、東京大学史料編纂所所蔵の影写本にも採録されている他、秀吉の鳥取攻めに関する叙述などにも一部が用いられており、内容的には新しいものではない。しかし、まとまった形では翻刻されておらず、また秀吉発給文書は、天正一〇年（一五八二）以前の織田政権期から晩年に至る長い時期のまとまった原本としても貴重であり、織豊期のものに関しては全点の写真と釈文を掲載した。「なお、二号文書は欠番となっており、原文書は含まれていなかったが、史料編纂所影写本および『津和野町史』に見える（天正八年）二月八日羽柴秀吉書状がこれに相当すると思われる、参考までに目録に加え、釈文も掲げた。」

内容は、まず天正八〜九年（一五八〇〜八一）の、秀吉の因幡・伯耆進出と鳥取攻めに関するものが二〇通余でもっとも多く、ついで朝鮮出兵に関するもの（三四〜三九号）がまとまっている。それ以外では、天

表1 亀井家文書 因幡・伯耆関係年表

天正六年(一五七八)七月	播磨上月城落城、尼子勝久・山中幸盛敗死。
七年(一五七九)九月	伯耆羽衣石城主南条元統、毛利氏に背き織田方に。
八年(一五八〇)六月	秀吉姫路を発ち、因幡進攻。
八月	鹿野城奪取、亀井茲矩城將に。
八月	吉川氏羽衣石城攻撃。
九月	鳥取城主山名豊国降伏。後、鳥取城毛利方に。
九月(一五八一)六月	秀吉姫路を発ち、第二次鳥取攻め。
七月	鳥取城包囲。
八月	吉川氏羽衣石城攻撃。
一〇月	鳥取城落城。
	秀吉鹿野を経て吉川軍と対陣。
	秀吉鳥取へ戻り、姫路へ帰城。

正一七年(一五八九)の知行充行状(三〇号)、賤ヶ岳・小牧長久手の合戦に関するもの(二六・二七号)、九州出陣に関するもの(二九号)、日野銀山に関するもの(四〇号)などがあり、他は儀礼的なものが多い。

この内、因幡・伯耆の関係は、表一に掲げたような経過をたどったもので、中国地方を担当する信長の部将であった秀吉は、天正八年六月(九月と、鳥取城の包囲で有名な天正九年六月)一〇月の二度にわたって出陣している。それ以前山中幸盛と行動を共にしていた亀井茲矩は、秀吉の下でこれに参加し、山中幸盛配下にあった尼子旧臣らと共に、因幡での毛利氏に対する前線であった鹿野城に入ってこれを守備した。織田信長の朱印状一通(一七号)は、こうした事情から、彼らを督励するために尼子旧領の出雲の充行いを約したものである。亀井茲矩は、鳥取落城の後そのまま鹿野城主となり、ここで領地を与えられている。この他、

織田方について伯耆での前線となった南条勘兵衛元統の羽衣石城^{うきいしじょう}などが文書に見えているが、これらの関連地名については図一に掲げた。

原本として特に興味を持たれるのは、秀吉文書の年代による変化であり、署判の形式、用紙の大きさや種類などいくつかの画期が認められることが指摘されているが、⁽²⁾亀井家文書の場合についてこれをまとめると、文書の編年になお若干の疑問はあるが、一応表二のようになる。この問題は様々な文書群の比較検討によって研究の深化が図られていくことと思うが、亀井家文書は、特に織田政権期の秀吉文書を多く含むことで、重要な情報を提供するものになると思われる。

江戸期の文書についてはここでは特に触れないが、老中奉書など、幕府と大名の関係を見る上で典型的なものと思われる。詳しくは目録と次章の解説を御覧いただきたい。

註

(1) 『津和野町史』第一卷(一九七〇年)、『鳥取県史』第二卷(一九七三年)、『新修鳥取市史』第一卷(一九八三年)など。

(2) 藤井謙治「解説」(神戸大学文学部日本史研究室編『中川家文書』、臨川書店、一九八七年)、堀新「豊臣政権と上杉氏—秀吉文書の様式の検討から—」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊一八輯哲学史学編、一九九二年)など。

*なお、文書の解説などに際し、岩城卓二氏、宇田川武久氏より御教示を得た。

(小島道裕)

表2 亀井家文書における秀吉文書の変化

備 考	料紙の大きさと種類	宛所の敬称	書止め	差 出 し	
	壇紙 奉書紙 大 小	「殿」 「とのへ」	「候也」 「恐々謹言」	(朱印) 〆日にかける〆 (朱印) 〆日下〆 秀吉 (朱印) 筑前守 / 秀吉 (朱印) 筑前守 / 又は羽筑 / 秀吉 (花押) 羽藤 / 秀吉 (花押) 藤吉郎 / 秀吉 (花押)	
6月～第2次鳥取攻め					天正7 (1579) 8
4月 賤ヶ岳合戦					9
4月 小牧長久手の戦					10
7月 秀吉関白就任					11
12月 秀吉太政大臣就任・豊臣改姓					12
					13
					14
					15
					16
					17
					18
4月～ 朝鮮出兵					19
					20
					文禄2
					3
					4
					5
					慶長2
					3 (1598)

○＝初見 △＝最終

二 亀井家文書の近世部分

亀井家文書の近世にかかる部分の特徴は、元和三年における転封に伴い、旧領の経営、転封に付随する実務的な事情がきわめて具体的に明らかになることであろう。このために必要な若干の解説をしておく。

(一) 亀井家の系譜

津和野藩主亀井家の系譜については、本文書中の4「亀井家三代経歴書」に、同家の家祖とされる亀井茲矩、津和野藩祖とされる亀井政矩、同二代亀井茲政の寛永十二年（一六三五）までの事蹟が記されている。その冒頭は、つぎの一つ書きで始まっている。

一 亀井新十良殿、山中鹿之助殿^ニ被為成候年号、天正^ニ武年甲戌四月中旬、因幡国邑美郡之内敷、私部城^ニ而御縁辺相整候、新十良殿拾八歳

ここに出てくる「亀井新十良」が亀井茲矩であり、「山中鹿之助」が山中幸盛である。『津和野町史』第二巻によれば、亀井家の先祖は出雲国湯之荘にあつて湯氏をもって氏としてきた。ついで、『寛政重修諸家譜』の記述にしたがえば、同家は代々尼子家に属したが、尼子家の滅亡後は山中幸盛に属し、山中幸盛が天正六年（一五七八）に播磨国上月城で自刃した後は尼子の遺臣を率いて豊臣秀吉の下に参じていた。このち、天正年間前半における亀井茲矩の動静はすでに見たとおりである。

本文書は、この亀井茲矩が秀吉に属し、織豊取立大名として鹿野城主となり、その嫡子亀井政矩が大坂の陣後、石見国津和野へ転封になり、同二代亀井茲政をへて、同三代亀井茲親が没する享保十六年（一七三二）前後までの約百五十年間のものを中心としている。ここに、この間の動きを藩主の系譜にしたがい、年表としたものが表3である。

表3 津和野藩主亀井家略年表

◎家祖・亀井茲矩（これのり）（弘治三年／＼一五五七）／慶長十七年／＼一六一二）

弘治 三年（一五五七）	出雲に生まれる、代々尼子家に属す。
永禄 十一年（一五六八）	尼子氏の滅亡。郎従は離散。
天正 元年（一五七三）	山中鹿助幸盛因幡国に来たりしおり、これに属す。
天正 六年（一五七八）	山中幸盛自刃のち、遺臣は亀井茲矩に属す。
天正 六年（一五七八）	天正九年：表1参照。
天正 九年（一五八二）	十月、因幡国鹿野の城主となし、同国気多郡のうちで一万三五〇〇石を領す。
天正 十年（一五八二）	六月、秀吉に琉球守を願う。
天正 十三年（一五八五）	武藏守に叙任す。
文禄 元年（一五九二）	同二年：朝鮮半島へ渡海。
慶長 五年（一六〇〇）	関ヶ原において軍功あり。因幡国高草郡に二万四五〇〇石の加増ありて、すべて三万八〇〇〇石を領す。なお、異説もある。
慶長十二年（一六〇七）	八月、渡航免状をうける。
慶長十七年（一六一二）	正月、鹿野において卒す。

◎初代・亀井政矩（まさのり）（天正十八年／＼一五九〇）／＼元和五年／＼一六一九）

慶長十四年（一六〇九）	伯耆国久米・河村両郡のうちに五〇〇〇石を領す。
慶長十七年（一六一二）	九月、遺領を継ぎ、あわせて四万三〇〇〇石を領す。
慶長十九年（一六一四）	十一月、大坂の陣により、江戸を発す。

元和 元年(一六一五)	四月、大坂の陣により、鹿野城を發す。
元和 三年(一六一七)	七月、石見国津和野の三本松城を賜い、所領を石見国鹿足・美濃・那賀・邑知四郡のうちに移された。
元和 五年(一六一九)	八月、津和野に到着。 八月、卒す。

◎二代・亀井茲政(これまさ) (元和三年△一六一七△延宝八年△一六八〇△)

元和 五年(一六一九)	冬、遺領を継ぐ。
寛永十二年(一六三五)	十二月、能登守に叙任す。
寛文 五年(一六六五)	五月、三〇〇〇石を庶兄に分かつ。
延宝 七年(一六七九)	九月、豊前守に叙任す。
延宝 八年(一六八〇)	十二月、卒す。

◎三代・亀井茲親(これちか) (寛文九年△一六六九△享保一六年△一七三〇△)

天和 元年(一六八二)	二月、遺領を継ぐ。
貞享 元年(一六八四)	十二月、能登守に叙任す。
元禄 四年(一六九二)	十月、隠岐守に叙任す。
享保十六年(一七三二)	五月、卒す。

(一) 鹿野城主時代

亀井茲矩は、天正九年(一五八一)十月に因幡国気多郡内で一万三五〇〇石を領し、関ヶ原戦後に同国高草郡における加増をへて三万八〇〇〇石の大名となる。これに先立ち、天正十年には秀吉から当時独立国であった琉球守、さらに文禄元年(一五九二)は台州守に任じられていた。この後徳川政権下で、慶長十二年(一六〇七)以降に朱印船貿易に携わっていた(目録：1・6・7)。

この慶長年間には、鹿野町への法度を始めとして、中央政権のもとに参じていた茲矩から、政矩および国元の重臣たちへ送った、領内支配向きの下問・指示が明らかになる(目録：9・10・11)。この時期の農政にかんしては、慶長末年から元和初年における領分高辻帳、納米勘定帳、さらには元和三年(一六一七)の転封に伴う種粃貸付の清算を図った証書類など(目録：15・16・17・18・19)があり、この時期の大名の経営状態を分析する史料になると思われる。

(二) 津和野への転封

亀井家は慶長十七年正月に茲矩が死去し、同年九月に政矩が遺領を継ぎ、すでに領していた五〇〇〇石と合わせて四万三〇〇〇石を領していた。大坂の陣後も徳川秀忠にしたがい、また国元から出陣している(目録：11―第二巻)。この後の元和三年七月二十日、津和野への転封を命じられる。このことに伴う国元への第一報として、この日だけでも政矩から二通、重臣河田忠右衛門から一通が送られ、翌日にも重臣塩路権兵衛から国元の牧圖書などへ発せられた(目録：11―第三巻)。このうち政矩は、八月十三日に津和野へ入り、同月二十二日に幕府の上使から城付武器を含め、引渡しをうけている(目録：20・21・22・23)。

本文書は、この転封に伴う諸般の処理すべき事項につき、きわめて具体的な事実関係を示している。さきに触れた鹿野領における経営やその一環としての農民への種貸も、この転封一件に伴って作成整備された文書群であった。

さらに、転封直後の新領支配関係の整備、福島正則の改易に伴う城請取、初代藩主政矩の療養（目録：11―第四・五・六巻）が詳細である。

（湯浅 隆）

（付記）

一九九〇年の九月、田中稔先生は本稿執筆者の湯浅隆、小島道裕をつれて、当時この文書を蔵していた古書肆に、この文書の下見に出かけた。訪問先の主はかなりの高齢で、田中先生に「自分の存命中に、この文書の落書き先を然るべくしたい、云々」と話していたのを、今になって思い出す。このお二人とも、すでに鬼籍に入ってしまった。

田中先生は、歴博における歴史資料の収集にとって、余人をもって替えがたい存在であり、この亀井家文書が最後の大事な仕事になったのではないだろうか。この文書は、故あって二年度に分けて購入したが、初年度の購入の時点で、先生はすでに伏しておられ、直接には立ち会っていただけなかった。結果は、人を介して報告したが、たいへんホッとして喜んでくださったという。

本稿を先生がご覧になれば、顔をしかめて頭をグラグラさせるだろう。されど、早く世に紹介することによって、先生の遺志に応えたいとおもう。

石見亀井家文書目録

〈文書番号〉 〈文書名〉

〈差出し〉

〈充所〉

〈年月日〉

〈備考〉

中央政権からの文書

1 亀井家歴代宛古文書集

※二号は欠番で文書原本はないが、参考に掲げた。

①	七	羽柴秀吉書状	藤吉郎／秀吉（花押）	亀井新十郎（茲矩）	（天正七年か）	六月二七日	其元郡はずれの知行の事
②	一一	羽柴秀吉書状	藤吉郎／秀吉（花押）	亀井新十郎（茲矩）	（天正八年）	七月二〇日	今明日中播州へ越す
③	一五	羽柴秀吉書状	藤吉郎／秀吉（花押）	亀井新十郎（茲矩）	（天正八年）	八月一七日	伯州表の儀先勢を遣す
④	一	羽柴秀吉書状	藤吉郎／秀吉（花押）	亀井新十郎（茲矩）	（天正八年）	九月一日	鹿野城へ兵糧を預く
⑤	一九	羽柴秀吉書状	藤吉郎／秀吉（花押）	亀井新十郎（茲矩）	（天正八年）	九月一七日	其表に人数等差遣す
	（※二）	羽柴秀吉書状	秀吉／（花押）	亀井新十郎（茲矩）	（天正八年）	一二月八日	来春は御出馬以前に働く
			藤吉郎／秀吉（*表書）				
⑥	三	羽柴秀吉書状	藤吉郎／秀吉（花押）	亀井新十郎（茲矩）	（天正九年）	二月一三日	宮吉表の敵の動靜

	〈文書番号〉	〈文書名〉	〈差出し〉	〈充所〉	〈年月日〉	〈備考〉
⑦	四	羽柴秀吉書状	藤吉郎／秀吉(花押)	亀井新十郎(茲矩)	(天正九年)	二月二日 出馬まで鹿野城敵守
⑧	五一	羽柴秀吉書状	藤吉郎／秀吉(花押)	亀井新十郎(茲矩)	(天正九年)	三月一日 武田源三郎衆儀の注意
⑨	五一	羽柴秀吉書状	藤吉郎／秀吉(花押)	亀井新十郎(茲矩)	(天正九年)	五月二日 六月一日に西表出馬
⑩	六	羽柴秀吉書状	藤吉郎／秀吉(花押)	亀井新十郎(茲矩)	(天正九年)	六月二日 今月二五日働きの手筈
⑪	八	羽柴秀吉書状	羽藤／秀吉(花押)	亀井新十郎(茲矩)	(天正九年)	七月二日 鉄砲の者同道相越すべし
⑫	九	羽柴秀吉書状	羽藤／秀吉(花押)	亀井新十郎(茲矩)	(天正九年)	七月六日 敵を集め持たせ越すべし
⑬	一〇	羽柴秀吉書状	羽藤／秀吉(花押)	亀井新十郎(茲矩)	(天正九年)	七月九日 敵兵糧搬入の阻止
⑭	一二	羽柴秀吉書状	羽藤／秀吉(花押)	亀井新十郎(茲矩)	(天正九年)	七月二〇日 其表儀につき急使派遣
⑮	一三	羽柴秀吉書状	筑前守／秀吉(花押)	亀井新十郎(茲矩)	(天正九年)	七月二二日 瓜・敵到来
⑯	一四	羽柴秀吉書状	筑前守／秀吉(花押)	亀井新十郎(茲矩)	(天正九年)	七月二六日 敵働く共出るべからず
⑰	一六	羽柴秀吉書状	筑前守／秀吉(花押)	亀井新十郎(茲矩)	(天正九年)	八月二八日 松茸の礼、兵糧等の注意
⑱	一七	織田信長朱印状	(朱印「天下布武」)	亀井新十郎(茲矩)	(天正九年)	九月七日 戦功により出雲を充行う
⑲	一八	羽柴秀吉書状	羽筑／秀吉(花押)	亀井新十郎(茲矩)	(天正九年)	九月二六日 鳥取落城近し城拘うべし
⑳	二〇	羽柴秀吉書状	筑前守／秀吉(花押)	亀井新十郎(茲矩)	(天正九年)	九月二二日 吉川の着陣、信長朱印状
㉑	二一	羽柴秀吉書状	羽筑／秀吉(花押)	亀井新十郎(茲矩)	(天正九年)	一〇月二〇日 吉川の動靜、城堅守の命
㉒	二五	羽柴秀吉書状	筑前守／秀吉(花押)	亀井新十郎(茲矩)	(天正一〇年)	正月八日 御出馬ほどなし
㉓	二二	羽柴秀吉書状	羽筑／秀吉(花押)	亀井新十郎(茲矩)	(天正一〇年)	五月六日 すくも塚の城他の戦勝
㉔	二四	羽柴秀吉書状	秀吉(花押)	亀井流求守(茲矩)	(天正一〇年)	一〇月二九日 其城境目ゆえ堅固に
㉕	五八	羽柴秀吉書状	秀吉(花押)	善浄坊(宮部継潤)	(天正一〇年)	一〇月二九日 伯州境目等の儀

②6	二六	羽柴秀吉書状	筑前守／秀吉(花押)	亀井琉流守(茲矩)	(天正二年)	四月二〇日	北伊勢・北近江の戦況
②7	二七	羽柴秀吉朱印状	筑前守／秀吉(朱印)	亀井琉琳守(茲矩)	(天正二年)	四月一〇日	家康小牧山に居陣
②8	二八	羽柴秀吉朱印状	秀吉(朱印)	亀井琉球守(茲矩)	(天正二年)	五月八日	普請の苦勞を謝す
②9	五四―三	羽柴秀吉朱印状	(朱印)	羽柴五郎左衛門尉	(天正三年)	閏八月二三日	鮭二尺到来
③0	二三	羽柴秀吉朱印状	(朱印)	亀井琉瑠守(茲矩)	(天正三年頃)	九月二日	伯州堺目の儀
③1	二九	羽柴秀吉朱印状	(朱印)	亀井琉球守(茲矩)	(天正四年)	八月二五日	九州出勢の用意を命ず
③2	三一	羽柴秀吉朱印状	(朱印)	亀井琉球守(茲矩)	(天正二、三、五年)	九月一六日	菱喰一つ到来
③3	三二	羽柴秀吉朱印状	(朱印)	亀井琉球守(茲矩)	(天正二、三、五年)	十一月二五日	鮭三尺到来
③4	三三	豊臣秀吉朱印状	(朱印)	亀井武蔵(茲矩)	(天正一、五、一六年)	二月二八日	歳暮の太刀など到来
③5	三〇	豊臣秀吉朱印状	(朱印)	亀井武蔵守(茲矩)	天正二七年	二月八日	知行充行(因幡国気多郡一万三千八百石)
③6	三四	豊臣秀吉朱印状	(朱印)	亀井武蔵守(茲矩)	(天正一九年)	九月八日	検地、造船木材件
③7	三五	豊臣秀吉朱印状	(朱印)	亀井台州守(茲矩)	(文禄元年)	二月二日	狩取る虎到来、来三月渡海
③8	三七	豊臣秀吉朱印状	(朱印)	亀井台州守(茲矩)	(文禄二年)	正月二六日	三月渡海件の指示
③9	三八	豊臣秀吉朱印状	(朱印)	亀井武蔵守(茲矩)	(文禄二年)	二月三日	迎船二艘相越すを賞す
④0	四一	豊臣秀次朱印状	(朱印「豊臣秀次」)	亀井武蔵守(茲矩)	(文禄二年)	四月九日	長々在陣に帷子を送る
④1	三六	豊臣秀吉朱印状	(朱印)	亀井武蔵守(茲矩)	(文禄二年)	五月一日	蔚山表の働きを賞す
④2	四三	豊臣秀次朱印状	(朱印「豊臣秀次」)	亀井武蔵守(茲矩)	(文禄二年)	五月二日	東門(瓜)二到来
④3	四二	豊臣秀次朱印状	(朱印「豊臣秀次」)	亀井武蔵守(茲矩)	(文禄二年)	五月二六日	長々在陣を勞う
④4	四〇	豊臣秀吉朱印状	(朱印)	亀井武蔵守(茲矩)	文禄四年	四月三日	西伯耆日野山に銀山出来
④5	三九	豊臣秀吉朱印状	(朱印)	亀井武蔵守(茲矩)	(慶長三年か)	五月一日	長々在陣に帷子を送る

文書番号	文書名	差出し	充所	年月日	備考
46	徳川家康書状	家康(花押)	亀井武蔵守(茲矩)	六月二〇日	瓜到来
47	徳川家康書状	家康(花押)	亀井武蔵守(茲矩)	六月二六日	堺瓜三籠到来
48	徳川家康黒印状	(黒印「源家康」)	亀井武蔵守(茲矩)	一〇月一七日	駿府普請人足差越す
49	徳川秀忠書状	秀忠(花押)	亀井武蔵守(茲矩)	二月二二日	歳暮小袖到来
50	徳川秀忠黒印状	(黒印「秀忠」)	亀井武蔵守(茲矩)	二月一日	年甫の太刀・馬到来
51	徳川秀忠黒印状	(黒印「秀忠」)	亀井武蔵守(茲矩)	四月二九日	端午の帷子単物到来
52	徳川秀忠黒印状	(黒印「秀忠」)	亀井武蔵守(茲矩)	五月三日	端午の帷子単物到来
53	徳川秀忠黒印状	(黒印「秀忠」)	亀井武蔵守(茲矩)	二月二八日	歳暮の小袖到来
54	握浮哪純広書状	握浮哪／純広(花押)・ (朱印)	亀井武蔵守(茲矩)	(慶長一三〇一五年)三月三日	御所様よりの鉄砲の礼
55	握浮哪純広書状	(同右)	亀井武蔵守(茲矩)	三月三日	八〇万斤船調達の件
56	徳川秀忠黒印状	(黒印「秀忠」)	亀井豊前守(政矩)	二月二三日	歳暮の小袖到来
57	徳川秀忠黒印状	(黒印「秀忠」)	亀井豊前守(政矩)	二月二九日	色鳥子百帖・鰯二到来
58	安藤重信等連署奉書	安藤重信・土井利勝・酒井忠利	亀井豊前守(政矩)・加藤左近太夫(貞泰)	八月二日	市橋下総守旧領を預く
59	伊丹康勝等連署奉書	伊丹康勝・安藤重信・土井利勝	亀井豊前守(政矩)	九月二四日	伯耆国市橋氏知行地儀
60	亀井茲政先祖覚書	亀井能登守(茲政)	(承応二年)		武蔵守以来の生国等
61	亀井茲政起請文案	亀井能登守(茲政)	慶安四年	六月二日	將軍家への忠誠
62	亀井茲政起請文添状案		(慶安四年)	六月二日	同右
63	松平信綱書状	信綱(花押)	亀井能登守(茲政)	(慶安四年)	六月二日 起請文血判の指示

⑥4	五九	片桐且元書狀	片市正／且元(花押)	亀井武藏守(茲政)	四月二〇日	因幡八束郡石高不足の件
⑥5	六〇	本多正純等連署書狀	本多正純・成瀬正成	亀井豊前守(政矩)	四月一四日	兵庫まで出陣すべし
⑥6	六一	成瀬正成書狀	成隼人正／□(花押)	亀井豊前(政矩)	四月二三日	上洛し御目見え尤も
⑥7	六二	成瀬正成書狀	成隼人正／□(花押)	亀井豊前(政矩)	四月二七日	本多佐渡守組入りを了承
⑥8	六三	土井利勝奉書	土井大炊助／利勝(花押)	亀井豊前(政矩)	五月二三日	公方様駿州田中到着
⑥9	六四	安藤重信等連署奉書	安藤重信・土井利勝・本多正純・酒井忠世	亀井豊前守(政矩)	九月一六日	大坂石垣普請の用意
⑦0	六五	松平康重書付	松周防守／(花押)・(朱印)	牧図書・塩冶内匠・湯木工允	三月一五日	元和四年納方払帳の事
⑦1	六七―一	徳川秀忠黒印狀	(黒印「秀忠」)	亀井大力(茲政)	七月一四日	材木目録の如く到来
⑦2	六七―二	嶋田利正書狀	嶋田弾正／利正(花押)	亀井大力(茲政)	七月二一日	栗の柱千本披露す
⑦3	六六	松平康重黒印狀	松周防守(黒印)	湯木工・牧図書・塩冶内匠	八月二八日	元和九年納米払の事
⑦4	六八―一	幕府老中連署奉書	永井尚政・井上政就・酒井忠勝・土井利勝・酒井忠世	亀井大力(茲政)	寛永二年	四月一日 其許火事後下屋敷作事儀
⑦5	六八―二	嶋田利正書狀	嶋田弾正忠／利正(花押)	亀井大力(茲政)	(寛永二年)	四月二日 同右
⑦6	六八―三	松平康重書狀	松周防守／康(花押)	塩冶大学・多胡勘解由・多胡主水正・加藤理右衛門・牧図書・湯木工允・塩冶内匠	(寛永二年)	五月一六日 同右
⑦7	六九	松平勝隆書狀	松平出雲守／□(花押)	亀井能登守(茲政)	(寛永一三年)	一二月二日 知行所新図提出の儀
⑦8	七〇	幕府老中連署奉書	阿部重次・阿部忠秋・松平信綱	亀井能登守(茲政)	(寛永一六年)	六月二日 耕作損亡、高札案を遣す

文書番号	文書名	差出し	充所	年月日	備考
79	幕府老中連署奉書	阿部忠秋・松平乗寿・松平信綱	亀井能登守(茲政)	(承応二年)	六月二四日 仙北源太郎他の赦免
80	土屋数直書状写	土屋但馬守	亀井能登守(茲政)	(万治三年)	正月一七日 伊予守参勤時分の儀
81	亀井式部(茲次)書状写	亀井式部	亀井貞右衛門(経矩)	(延宝二年)	十一月一六日 亀井式部煩につき罷退く
82	亀井式部(茲次)書状写	亀井式部	青木与六	(延宝二年)	十一月一六日 同右件
83	勝田久右衛門書状写	勝田久右衛門	青木与六	(延宝二年)	十一月一六日 同右件
84	亀井茲政書状案	亀井能登守	井伊直澄、酒井忠清(各一通)	(延宝三年)	四月二七日 亀井式部在所帰着
85	亀井茲政書状案 (二通分)	亀井能登守	稲葉政則・久世広之・土屋数直・阿部正能、土井利房・堀田正俊	(延宝三年)	四月二七日 同右
86	朽木季綱書状	伊予△表書	多胡治部右衛門	(延宝三年)	閏四月一三日 案文一段然るべし
87	幕府老中連署奉書	土屋数直・久世広之・稲葉正則	亀井能登守(茲政)	延宝六年	正月二八日 津和野城石垣修復許可
88	土屋数直書状	土屋但馬守/数直(花押)	亀井能登守(茲政)	(延宝六年)	正月二八日 同右
89	幕府老中連署奉書	板倉重種・堀田正俊・大久保忠朝	亀井松之助(茲親)	(延宝九年)	二月二六日 登城召
90	亀井茲親請状案	亀井松之助	大久保忠朝・堀田正俊・板倉重種	(延宝九年)	二月二六日 七五―一の請状
91	松平康豊書状	松平周防守△表書	亀井松之助(茲親)	(延宝九年)	二月二六日 明日登城に同道す
92	島津久壽書状	嶋津式部少輔△	亀井松之助(茲親)	(延宝九年)	二月二六日 明日登城を祝す

93	七六一三	松平山城守書狀	松平山城守〓〓〓	亀井松之助(茲親)	(延宝九年)	二月二六日	明日登城に欠席
94	七六一四	亀井経矩書狀	亀井権之佐〓〓〓	亀井松之助(茲親)	(延宝九年)	二月二六日	明日登城に同道
95	七六一五	内田伝左衛門書狀	内田伝左衛門〓〓〓	亀井松之助(茲親)	(延宝九年)	二月二六日	明日登城に欠席
96	七六一六	大久保右京亮書狀	大久保右京亮〓〓〓	亀井松之助(茲親)	(延宝九年)	二月二六日	明日登城を祝す
97	七六一七	大岡佐渡守書狀	大岡佐渡守〓〓〓	亀井松之助(茲親)	(延宝九年)	二月二六日	明日登城し祝意を述べ
98	七七一一	幕府老中連署奉書	板倉重種・堀田正俊・大久保忠朝	亀井松之助(茲親)	(延宝九年)	三月五日	明日継目御礼登城の命
99	七七一二	亀井茲親請狀写	亀井松之助(茲親)	大久保忠朝・堀田正俊・板倉重種	(延宝九年)	三月五日	七七一一の請狀
100	七八	幕府老中連署奉書	阿部正武・大久保忠朝	亀井松之助(茲親)	(天和三年)	七月三日	津和野城石垣普請許可
101	七九一一	幕府老中奉書	戸田忠昌	亀井松之助(茲親)	(天和三年)	九月一九日	鶴一隻進上披露す
102	七九一二	亀井茲親請狀写	戸田山城守(忠昌)	戸田山城守(忠昌)	(天和三年)	九月一九日	七九一一の請狀
103	八〇	幕府老中連署奉書	阿部正武・戸田忠昌・大久保忠朝	亀井松之助(茲親)	(天和三年)	十一月一日	津和野城石垣修補許可
104	八一	幕府老中連署奉書	大久保忠朝・戸田忠昌・阿部正武	亀井松之助(茲親)	(貞享元年)	八月九日	津和野城石垣修補許可
105	八二一一	幕府老中奉書	大久保忠朝	亀井松之助(茲親)	(貞享元年)	一〇月六日	鶴進上披露す
106	八二一二	亀井茲親請狀写	大久保加賀守(忠朝)	大久保加賀守(忠朝)	(貞享元年)	一〇月六日	八二一一の請狀
107	八三	幕府老中奉書	大久保忠朝	亀井能登守(茲親)	(貞享二年)	一〇月一八日	鶴一つ進上披露す
108	八四	幕府老中連署奉書	大久保忠朝・戸田忠昌・阿部正武	亀井能登守(茲親)	(貞享三年)	六月九日	津和野城石垣修補許可
109	八五	伝法院執事奉書	伝法院	亀井能登守(茲親)	(貞享三年)	六月二六日	佐久間四郎二郎赦免
110	八六	幕府老中連署返札	戸田忠昌・阿部正武・	亀井能登守(茲親)	(貞享三年)	八月一八日	在所到着の御礼を披露

文書番号	文書名	差出し	充所	年月日	備考
111	幕府老中返札	阿部正武	亀井能登守(茲親)	(貞享三年) 二月 六日	肴一種進上披露す
112	幕府老中連署奉書	土屋政直・戸田忠昌・阿部正武・大久保忠朝	亀井能登守(茲親)	(貞享五年) 二月 一日	火事ニ付増火消仰付く
113	幕府老中連署奉書	土屋政直・戸田忠昌・阿部正武・大久保忠朝	亀井能登守(茲親)	元禄二年 五月二九日	津和野城石垣修補許可
114	幕府老中奉書	土屋政直	亀井能登守(茲親)	(元禄二年) 九月二三日	鶴一隻進上披露す
115	幕府老中奉書	阿部正武	亀井隠岐守(茲親)	(元禄一〇年) 九月一〇日	御重硯進上披露す
116	幕府老中奉書	(寺社奉行井上正岑)		寅(元禄十一年) 二月	別紙品を尋ぬ
117	覚			(元禄十一年) 二月	細目書式の指示
118	覚			(元禄十一年) 同右	
119	国絵図書式雛形			(元禄十一年) 縮尺と大概の書式	
120	国絵図書式雛形			(元禄十一年) 国境の書式	
121	幕府老中奉書	稲葉正往	亀井隠岐守(茲親)	(元禄一四年) 八月二五日	銀香炉進上披露す
122	幕府老中返札	小笠原長重	亀井隠岐守(茲親)	(宝永六年) 八月一三日	参勤時分の儀
123	幕府老中連署返札	大久保忠増・本多正永	亀井隠岐守(茲親)	(宝永七年) 二月 七日	参勤時分の儀
124	山路彦左衛門覚書			(正徳三年) 二月一三日	家継代替り御内緒の儀
125	幕府老中返札	井上正岑	亀井隠岐守(茲親)	(享保二年) 一〇月二五日	領地朱印頂戴御礼返書
126	幕府老中連署返札	水野忠之・戸田忠真・井上正岑	亀井隠岐守(茲親)	(享保七年) 二月 五日	参勤時分の儀
127	幕府老中書付		亀井隠岐守(茲親)家来	寅(享保七年) 二月	余慶の人数召連れ間敷
128	幕府老中書付		亀井隠岐守(茲親)	(享保七年) 七月	参勤交代合儀

⑫	九九一二	幕府老中書付	松平周防守(康豊)	(享保七年)	七月	同右
⑬	一〇〇	幕府老中連署返札 安藤重行・水野忠之・戸田忠真	亀井隠岐守(茲親)	(享保七年)	十一月 九日	参勤時分の儀
⑭	一〇一	幕府老中奉書 松平乗邑	亀井隠岐守(茲親)	(享保八年)	一〇月 九日	朝鮮松進上披露す
⑮	一〇二	幕府老中連署返札 松平乗邑・安藤重行・水野忠之	亀井隠岐守(茲親)	(享保九年)	十一月 四日	参勤時分の儀
⑯	一〇三	幕府老中書付 (松平乗邑)	亀井隠岐守(茲親)家来	(享保一一年)	十一月二五日	登城召
⑰	一〇四一	幕府老中連署返札 松平忠周・松平乗邑・水野忠之	亀井隠岐守(茲親)	(享保一一年)	十一月 四日	参勤時分の儀
⑱	一〇四一二	亀井茲親口上書并 老中附札	亀井隠岐守(茲親)	(享保一二年)	十一月二一日	参勤時分延期願い
⑲	一〇四一三	幕府老中返札 松平忠周	亀井隠岐守(茲親)	(享保一二年)	正月二五日	参勤時節延期御礼へ
⑳	一〇四一四	覚	亀井隠岐守(茲親)	(享保一二年)	閏正月二三日	参勤時分延期の経緯
㉑	一〇五	幕府老中返札 松平忠周	亀井隠岐守(茲親)	(享保一二年)	正月 六日	松之助嫡子仰付の御礼へ
㉒	一〇六	幕府老中返札 安藤重行	亀井隠岐守(茲親)	(享保一二年)	正月 六日	同右
㉓	一〇七	幕府老中書付	亀井隠岐守(茲親)	(享保一二年)	四月一六日	出火の節大手組代仰付く
㉔	一〇八一 a	亀井茲親願書案	亀井隠岐守(茲親)	(享保一二年)	四月二二日	松之丞御目見えを願う
㉕	一〇八一 b	亀井茲親伺書案	亀井隠岐守(茲親)	(享保一二年)	四月二二日	松之丞袖留めを伺う
㉖	一〇八一二	亀井茲親伺書并老 中附札	亀井隠岐守(茲親)	(享保一二年)	四月二二日	同右
㉗	一〇八一三	亀井茲親願書案	亀井隠岐守(茲親)	(享保一二年)	五月二一日	松之丞五節句月次登城願
㉘	一〇八一四 a	幕府老中書付	亀井松之丞(茲満)	(享保一二年)		五節句月次登城の許可
㉙	一〇八一四 b	亀井茲親請書案	亀井隠岐守(茲親)	(享保一二年)	五月二一日	aの請状

〈文書番号〉	〈文書名〉	〈差出し〉	〈充所〉	〈年月日〉	〈備考〉
⑭⑦ 一〇九	龜井茲親伺書(二通)	龜井隱岐守(茲親)		(享保二二年) 四月二四日	御目見え節進上品目錄
⑭⑧ 一一〇—一	龜井茲親伺書案	龜井隱岐守(茲親)		(享保一三年) 一一月二三日	参勤時分延期を願う
⑭⑨ 一一〇—二	龜井茲親願書案	龜井隱岐守(茲親)		(享保一三年) 一一月二八日	龜井因幡守前髪執を願う
⑮〇 一一一	幕府老中書付	松平信祝	龜井隱岐守(茲親)	(享保一五年) 九月 八日	松平周防守と交代参府
⑮① 号外—一	龜井茲満覚書案			(享保一七年頃)	龜井家松平家在所交代儀
⑮② 一一二	幕府老中書付	本多忠良	龜井因幡守(茲満)	(享保二〇年) 一二月二二日	松平周防守病死交代帰国
⑮③ 一一三—一	龜井茲満願書案	龜井因幡守(茲満)	松平乗邑・松平信祝・本多忠良	(享保二二年) 正月	龜井八十郎養子願
⑮④ 一一三—二	龜井茲満願書案	龜井因幡守(茲満)		(享保二二年) 正月一六日	龜井八十郎仮養子願
⑮⑤ 一一三—三	龜井茲満願書案	龜井因幡守(茲満)		(享保二二年) 六月一八日	同右
⑮⑥ 一一三—四	龜井茲満願書案	龜井因幡守(茲満)		(享保二二年) 六月二一日	同右
⑮⑦ 一一四—一	曾我又左衛門等書付	曾我又左衛門・建部修理	龜井八十郎(茲延)留守居	(元文元年) 一〇月 三日	明日曾我宅へ参らるへし
⑮⑧ 一一四—二	幕府老中書付	本多忠良	龜井豊前守(茲延)	(元文二年) 六月 四日	曾我・建部国目付解任
⑮⑨ 号外—二	某覚書			(元文年間頃)	在所交代の次第
〈番号〉	〈文書名〉	〈年月日〉	〈員数・形状〉	〈差出先・備考〉	
龜井家由緒					
2	龜井茲矩事蹟次第書	(年月日不詳)	一卷、卷子装		龜井茲矩の事蹟次第書。
3	龜井茲矩事蹟次第書稿本	(年月日不詳)	一冊、堅帳		龜井茲矩の事蹟次第書きの原稿。
4	龜井家三代経歴書	(年月日不詳)	一卷、卷子装		龜井茲矩、政矩、茲政の事蹟を記したもの。寛永十二年十

二月晦日までの記事。

亀井茲矩・茲政と中央政權

5 亀井茲矩願文

(天正〱慶長か)

一通、掛幅装

亀井茲矩↓。領内の豊饒を祈念したもの。

6 朱印船貿易荷物覚書

慶長十五、六、十

一通、掛幅装

亀井茲矩↓大泥国大王。通商の途絶していた同国へ商船を差し向け、国王に書を送ったもの。

7 亀井茲矩書状

慶長十五、八、二十二

一通、掛幅装

8 亀井茲矩書状(後欠)

(年月日不詳)

一通、掛幅装

亀井茲矩↓。道中のねぎらい。

9 亀井茲矩書状

(慶長末か)

一通、卷子装

亀井茲矩↓亀井政矩か。嫡子に宛てた治世上の遺戒。

10 亀井茲矩・政矩・茲政書状

(慶長か)

一卷(六通)、卷子装

亀井茲矩↓亀井政矩。身辺の様子など。

↓。鹿野町への法度。

① 亀井茲矩書状

(慶長十六か)三、十七

② 鹿野町諸事申付次第

慶長十、正、三

亀井茲矩↓栗町新右衛門。領内諸支配向きの指示。

③ 亀井茲矩書状

(年不詳)二、四

亀井茲矩↓亀井政矩。年始の礼、所領の移譲。

④ 亀井茲矩書状

慶長十四、正、三

亀井茲矩↓亀井茲矩。在京大名衆の動静の伝達。

⑤ 亀井政矩書状

慶長十五、十二、晦

亀井茲矩↓栗町新右衛門。諸政治向きの指示(京都の医家へ門を寄進するために材木を送ること、収納米の売却。)

⑥ 亀井政矩書状

(年不詳)卯、十二

11 亀井家歴代書状

六卷(四十八通)、卷子装

第一卷：亀井茲矩書状

(年不詳)

九通、

亀井茲矩↓野伊、布源、多宗。国元の治世につき下問、指示を与えたもの。

① 亀井茲矩書状

(年不詳)正、二十九

② 亀井茲矩書状

(年不詳)三、十一

③ 亀井茲矩書状

(年不詳)三、十四

〔番号〕	〔文書名〕	〔年月日〕	〔員数・形状〕	〔差出・宛先・備考〕
④	亀井茲矩書状	(年不詳) 卯、朔		
⑤	亀井茲矩書状	(年月日不詳)		
⑥	亀井茲矩書状	(年不詳) 三、十一		
⑦	亀井茲矩書状(前欠)	(年不詳) 九、九		
⑧	亀井茲矩書状	(年不詳) 十二、十三		
⑨	亀井茲矩書状	(年不詳) 九、		
第二卷：				
		慶長十九、〽元和二、	十通、	大坂の陣から家康死去の時期における幕閣の動向を背景に、 国元の治世に指示を与えたもの。
①	亀井政矩陣中法度	慶長十九、十一、十五		亀井茲政↓。
②	立花宗茂書状	〔慶長十九〕十一、十		立花宗茂↓亀井政矩。
③	亀井政矩書状	〔慶長十九〕十二、二十二		亀井政矩↓加藤理右衛門他。大坂の陣中から国元への指示。
④	多胡主水他書状	〔慶長二十〕卯、二十六		多胡主水他書状↓新庄九郎介。須磨まで参着の件。
⑤	牧図書他書状	〔元和 元〕六、二十三		牧図書他↓新庄九郎介。国元における大坂方落人探索指示。
⑥	亀井政矩寛書	〔元和 元〕閏六、十一		亀井政矩↓。伴加兵衛他召し放し一件。
⑦	亀井政矩書状	〔元和 二〕卯、十八		亀井政矩↓牧図書他。大御所死去ほか国元への指示。
⑧	亀井政矩書状	〔元和 元〕閏六、六		亀井政矩↓奉行中。たばこ法度の触を国元へ通知。
⑨	亀井政矩書状	(年不詳) 十二、十二		亀井政矩↓牧図書他。作事の件ほか国元の治世につき指示。
⑩	亀井政矩書状	〔元和 二〕卯、二十三		亀井政矩↓牧図書他。大御所死去関連ほか国元への指示。
第三卷：				
		元和 三、〽四、	八通、	元和三年の移封前後における、藩主と国元とのやりとり。
①	亀井政矩書状	(年不詳) 五、八		亀井政矩↓塩路内匠助他。国元の治世につき指示。
②	亀井政矩書状	〔元和 三〕七、二十		亀井政矩↓牧図書他。石見へ国替の通知と用意の指示。

第五卷：

- ③ 亀井政矩書状
- ④ 河田忠右衛門他書状
- ⑤ 塩路権兵衛書状
- ⑥ 島田次兵衛書状
- ⑦ 亀井政矩書状
- ⑧ 亀井政矩書状
- ⑨ 亀井政矩書状
- ⑩ 亀井政矩書状
- ⑪ 亀井政矩書状
- ⑫ 亀井政矩書状
- ⑬ 亀井政矩書状
- ⑭ 亀井政矩書状
- ⑮ 亀井政矩書状
- ⑯ 亀井政矩書状
- ⑰ 亀井政矩書状
- ⑱ 亀井政矩書状
- ⑲ 亀井政矩書状
- ⑳ 亀井政矩書状
- ㉑ 亀井政矩書状
- ㉒ 亀井政矩書状
- ㉓ 亀井政矩書状
- ㉔ 亀井政矩書状
- ㉕ 亀井政矩書状
- ㉖ 亀井政矩書状
- ㉗ 亀井政矩書状
- ㉘ 亀井政矩書状
- ㉙ 亀井政矩書状
- ㉚ 亀井政矩書状
- ㉛ 亀井政矩書状
- ㉜ 亀井政矩書状
- ㉝ 亀井政矩書状
- ㉞ 亀井政矩書状
- ㉟ 亀井政矩書状
- ㊱ 亀井政矩書状
- ㊲ 亀井政矩書状
- ㊳ 亀井政矩書状
- ㊴ 亀井政矩書状
- ㊵ 亀井政矩書状
- ㊶ 亀井政矩書状
- ㊷ 亀井政矩書状
- ㊸ 亀井政矩書状
- ㊹ 亀井政矩書状
- ㊺ 亀井政矩書状
- ㊻ 亀井政矩書状
- ㊼ 亀井政矩書状
- ㊽ 亀井政矩書状
- ㊾ 亀井政矩書状
- ㊿ 亀井政矩書状

〔元和 三〕 七、二十
〔元和 三〕 七、二十
〔元和 三〕 七、二十一
〔年不詳〕 九、六
〔元和 四〕後三、五
〔年不詳〕 五、二十六
元和 四、
〔年不詳〕 五、二十九
〔年不詳〕 七、五
〔年不詳〕 八、四
元和 四、 八、十八
〔年不詳〕 八、二十
〔年不詳〕 八、二十
〔年不詳〕 九、十一
〔年不詳〕 九、十九
元和 四、 〃五、
〔年不詳〕 十、六
〔年不詳〕 十、二十二
〔年不詳〕 十一、二十四

四通、

第四卷：

- ① 亀井政矩書状
- ② 亀井政矩書状△前欠▽
- ③ 亀井政矩書状
- ④ 亀井政矩書状
- ⑤ 亀井政矩書状
- ⑥ 亀井政矩書状
- ⑦ 亀井政矩書状
- ⑧ 亀井政矩書状△前欠▽

〔元和 三〕 七、二十
〔元和 三〕 七、二十
〔元和 三〕 七、二十一
〔年不詳〕 九、六
〔元和 四〕後三、五
〔年不詳〕 五、二十六
元和 四、
〔年不詳〕 五、二十九
〔年不詳〕 七、五
〔年不詳〕 八、四
元和 四、 八、十八
〔年不詳〕 八、二十
〔年不詳〕 八、二十
〔年不詳〕 九、十一
〔年不詳〕 九、十九
元和 四、 〃五、
〔年不詳〕 十、六
〔年不詳〕 十、二十二
〔年不詳〕 十一、二十四

八通、

亀井政矩↓牧図書他。石見への先発者の指名。
河田忠右衛門他↓牧図書他。石見へ国替の件に付。
塩路権兵衛↓牧図書他。石見へ国替の件に付、続報。
島田次兵衛↓亀井政矩。療養の件で、將軍の意向を伝達。
亀井政矩↓河田忠右衛門他。国元の治世につき指示。
亀井政矩↓河田忠右衛門他。国元の治世につき指示。
藩主から、国元の治世につき送られた書簡。
亀井政矩↓河田忠右衛門他。界他への懸銀の件ほか。
亀井政矩↓河田忠右衛門他。国元の治世につき指示。
亀井政矩↓河田忠右衛門他。河村助作他二名の召し放しの指示ほか。
亀井政矩↓塩路内匠助他。家中への加増の指示。
亀井政矩↓塩路内匠助他。家中への知行召し上げ、扶持方の指示。
亀井政矩↓塩路内匠助他。国元の治世につき指示。
亀井政矩↓塩路内匠助他。国元の治世につき指示。
亀井政矩↓塩路内匠助他。国元の治世につき指示。
藩主から、国元の治世につき送られた書簡。
亀井政矩↓。国元の治世につき指示。
亀井政矩↓塩路内匠助他。国元の治世につき指示。巷間の世事など。
亀井政矩↓塩路内匠助他。国元の治世につき指示。銀山のこと他。

△番号▽	△文書名▽	△年月日▽	△員数・形状▽	△差出↓宛先。備考▽
④	亀井政矩書状	〔元和五〕正、二十九	九通、	亀井政矩↓塩路内匠助他。国元の治世向につき指示。 藩主から、国元の治世につき送られた書簡。
第六卷：				
①	亀井政矩書状△後欠▽	〔年月日不詳〕		亀井政矩↓。国元の治世向につき指示。
②	亀井政矩書状	〔年不詳〕二、三十		亀井政矩↓塩路内匠助他。有間の湯逗留の者。
③	亀井政矩書状	〔年不詳〕三、二		亀井政矩↓塩路内匠助他。有間の湯逗留の件。
④	亀井政矩書状	〔年不詳〕卯、六		亀井政矩↓塩路内匠助他。有間の湯逗留の件、国元の治世向につき指示。
⑤	亀井政矩書状	〔年不詳〕卯、十七		亀井政矩↓塩路内匠助他。国元の治世向につき指示。
⑥	亀井政矩書状	〔元和五〕五、十七		亀井政矩↓塩路内匠助他。福島正則進退の件、国元の治世向につき指示。
⑦	原田作兵衛覚書	元和五、五、十七		原田作兵衛↓御奉行衆。「御てつほう衆人数之覚」
⑧	亀井政矩書状	〔元和五〕五、二十八		亀井政矩↓牧図書他。秀忠上洛、福島正則進退の件、ほか。
⑨	亀井茲政覚書	〔年不詳〕子七、晦		亀井茲政↓組頭中。番組の頭の交代の指示。
12	柳生但馬守宗矩書状	〔年不詳〕六、八	一通、掛幅装	柳生但馬守宗矩↓亀井政矩。
13	亀井茲矩書状写		二卷、卷子装	
①	亀井茲矩書状写			亀井茲矩↓亀井政矩。処世のことを記したもの。八代藩主矩賢が寛政二、正、十二に模写。
②	亀井茲矩書状写			亀井茲矩↓塩五郎大夫。慶長十三年における朱印船建造のことを記したもの。明治三十二年に模写。
14	松平康重書状	〔年不詳〕三、十九	一通、掛幅装	松平康重↓湯八郎右衛門。納米払勘定帳の検分ほか。

因幡国鹿野領

- 15 亀井政矩領分高辻帳并納米勘定帳 (慶長、元和) 七冊、
- ① 亀井政矩領分高辻帳 慶長十八、四、十四
- ② 亀井政矩領分高辻帳 慶長十八、五、十一
- ③ 伯耆国高草・気多郡丑ノ納米御勘定一紙目錄 慶長十八、十二、晦
- ④ 丑ノ納米一紙目錄 慶長十八、十二、晦
- ⑤ 伯耆国之内辰歳分御蔵入郷帳 元和 二、十二、二十四
- ⑥ 伯耆国之内辰歳分御蔵入弘帳 元和 三、七、十三
- ⑦ 伯耆国内辰年御勘定目錄 元和 三、七、二十二
- 16 所領関係諸記録 (慶長、寛文、文化) 八冊、三通
- ① 伯耆国久米郡河村郡之内郷帳 (年月日不詳) 一冊、
- ② 気多郡・高草郡高目錄 (年月日不詳) 一冊、
- ③ 御知行高辻之御帳 慶長十八、卯、二 一冊、
- ④ 三万石分〔高辻之御帳〕 (年月日不詳) 一冊、
- ⑤ 元和三年巳ノ納代官弘出之寄帳 (年月日不詳) 一冊、
- ⑥ 石州御蔵内亀井豊前守殿相凌候分 元和 三、八、十三 一冊、
- ⑦ 御国替津和野御請取之時寺社領替地引渡証文 元和 五、十一、二十三 一冊、
- ⑧ 合八千八百八拾石九斗老升七合 (年月日不詳) 一通、
- と有之書付
- ⑨ 石州安濃郡之内加藤内蔵助拝領 慶安 元、五、十一 一冊、

△番号▽	△文書名▽	△年月日▽	△員数・形状▽	△差出↓宛先。備考▽
	郷村高帳			
⑩	石州之内亀井能登守領田畠石高帳	寛文七、七、六	一冊、	
⑪	入日記〔現物改覚書〕	文化十三、	一通、	
17	亀井家領分支配方記録	元和二、五、	六通、卷子装	
①	伯耆国内辰歳分郷帳目録	元和二、十二、二十四		
②	伯耆国内辰年御勘定目録	元和三、七、二十二		
③	伯耆国内辰年御勘定目録	元和三、七、二十二		
④	伯州ニ而山田五郎兵衛ノ預申御材木之覚	元和五、九、十五		
⑤	伯州辰年負払御勘定目録	元和五、九、十五		
⑥	覚〔村々田畠覚書〕	(年不詳) 五、二十四		
18	種子米預り方証文	慶長ノ元和	六卷(八十一通)、卷子装	
①	御種子米預り方証文	慶長	六通	
②	御種子米預り方証文	元和二、	三十通	
③	御種子米預り方証文	元和三、	十五通	
④	御種子米預り方証文	元和三、	十六通	
⑤	御種子米預り方証文	元和三、	十三通	
⑥	粃種利米手形	元和二、	一通	
19	粃種子利米之内預り状上り分帳	(元和か)	二冊	
①	元和二年分			

② 年不詳

津和野への転封

- | | | | | |
|----|----------------|------------|--------|---------------------------------------------|
| 20 | 津和野移封一件引継関係覚書 | 元和 三、五 | 六通、卷子装 | |
| ① | 供米之斗立 | 元和 三、八、二十二 | | |
| ② | 村々ニ預ケ置米之覚 | 元和 三、八、二十二 | | |
| ③ | 酒井出羽守御城米預り申事 | 元和 三、八、二十二 | | |
| ④ | 酒井出羽守城米預り申俵物之事 | 元和 三、八、二十二 | | |
| ⑤ | 渡申塩之事 | 元和 三、八、二十二 | | |
| ⑥ | 御城米算用之覚 | 元和 五、五、二十三 | | |
| 21 | 酒井出羽守城鉄砲并武具目録 | 元和 三、八、二十二 | 一通、卷子装 | 酒井出羽守↓柳生又右衛門、小笠原市左衛門、駒井右京。
城付武具請取の正式な記録。 |
| 22 | 酒井出羽守書状断簡 | (年月日不詳) | 一通、掛幅装 | 酒井出羽守↓柳生又右衛門 |
| 23 | 城付武具授受一件 | 元和 三、五、 | 二冊 | 柳生又右衛門、小笠原市左衛門、駒井右京↓亀井。城付武具の預け状。 |
| ① | 城鉄砲并武具之目録写 | 元和 三、八、二十二 | | |
| ② | 〔城鉄砲并武具之目録写〕 | 元和 五、六、二 | | 〔御城附鉄砲武具〕を酒井仙千代へ引き渡した目録を正徳四、に写したもの |
| 24 | 牧勘兵衛城米請取状写 | 元和 五、 | 三通、卷子装 | |
| 25 | 御城御武具之帳 | 元和 六、 | 一通、卷子装 | 鉄砲などの武器の員数と家中への配分状況を記したもの。 |
| 26 | 諸事取締ニ付家中連判状 | (元和か) | 一通、卷子装 | 家中の八十九人が家内の取締りにつき誓約したもの |

△番号△ △文書名△ △年月日△ △員数・形状△ △差出↓宛先。備考△

石見国津和野領

27 〔津和野領内古高新聞石高目録他 元和二、四、五 九通、卷子装

諸物成等留書〕

28 津和野領田原村田畠算用覚書 元和五、六、 一通、卷子装

29 津和野領請取一件 (元和か) 四通、卷子装

① (年不詳) 九、二

② (年不詳) 九、十

③ (年不詳) 午十、二十三

④ (年不詳) 三、二十二

30 亀井家諸記録 元和寛永 二冊、一通

① 酉之納払方目録 元和九、十、二十八 一冊、

② 津和野領元和六年分勘定相済候 (年不詳) 戊 二、十四 一通、

手形

③ 集案御作事万銀払高目録 寛永十一、八、二十三 一冊、

31 亀井・毛利領分における人返し一 (年不詳) 三通、卷子装

① 走申候小者百姓の人帰シニ付案 (年不詳) 辰 六、二

文

② 亀井領分松平長門守領分ニ而走 (年不詳) 辰 六、二

申候小者百姓の人帰シニ付

③ 覚書〔亀井領分松平長門守領分 (年月日不詳)

ニ而走申候小者百姓の人帰ニシ付〕

幕閣との交渉ほか

- | | | | |
|----|---------------------------|---------------------------------------|-----------------------|
| 43 | 佐々木玄龍書状 | (年不詳) 壬戌 九、
(年不詳) 辛卯十一、
元禄末、享保初 | 一二七通、 |
| 42 | 朝鮮通信使奉呈状 | (年不詳) 壬戌 九、
(年不詳) 辛卯十一、
元禄末、享保初 | 二通、 |
| 41 | 津和野領古地図 | (年月日不詳) | 三十三鋪、十一封
〔二四五枚〕、二冊 |
| 40 | ① 石州千振村記
② 千振山開墾記 | 元禄 三、
(年不詳) | 二卷、卷子装 |
| 39 | 年々御貸返上不極銀之覚 | 元禄 八、享保 六、 | 一冊、 |
| 38 | 御知行米惣銀高・御領地出来紙代
銀高惣勘定帳 | 貞享 三、元禄 五、 | 一冊、 |
| 37 | 津和野三本松城修復記 | 貞享 二、 | 一巻、卷子装 |
| 36 | 御納戸金銀請取惣目録 | 延宝 八、元禄 八、 | 一冊、 |
| 35 | 御納戸銀請取惣目録 | 延宝 八、貞享 四、 | 一冊、 |
| 34 | 御知行米惣銀高・御領地出来紙銀
惣勘定帳 | 延宝 八、貞享 二、 | 一冊、 |
| 33 | 亀井家諸士博奕法度請状 | 〔寛永十八か〕二、 九 | 一通、卷子装 |
| 32 | 津和野御領分古高新聞目録 | 〔寛永ころか〕 | 一通、卷子装 |

藩主が城の修復の経緯を綴った公式記録。

亀井茲親の命による、石州美濃郡の千振の開墾の経緯を漢文体で綴った公式記録。

佐々木玄龍↓亀井茲親。幕府の御奥祐筆佐々木玄龍が、在国中の幕閣における老中・諸大名などの消息、江戸市政

45	文書四通（慶長十四、寛永二、寛永六、年不詳）	△番号▽	△文書名▽	△年月日▽	△員数・形状▽	△差出↓宛先。備考▽ の雑事などを知らせたもの。
----	------------------------	------	-------	-------	---------	-----------------------------

△ 釈 文 △

1 亀井家歴代宛古文書

①(七号)羽柴秀吉書狀(折紙) 縦二八・七
横四四・四

尚以先日者何にても

見やけ可遣候処

いとまこいなく被帰候

如何之事候哉、返々郡はつれ

の事、能々あらためて

其方へおさめ可置之候、

以上、

先度者為見舞

上国苦身之至

令祝着候、仍其元

郡はつれの知行之

事、代官職申

付候条、其方可

有納所候、猶増田仁右衛門尉

可申候、恐々謹言、

藤吉郎

(天正七年か)
六月廿七日 秀吉(花押)

亀井新十郎殿

進之

②(二一号)羽柴秀吉書狀(折紙) 縦一九・三
横四四・八

其元知行方之

事、可相紛儀ニ

あらす候間、歴然候

やからを申掠候事者

何かた成共可為越度候、

其方申分迄にて候、不能

分別候、双方聞届、可□

□候、猶仁右衛門尉可申候、以上、

使札之趣得其

意候、其表無相

替事候由、可為其

分候、我等事、今

明日中播州江相

越候間、猶追而可

申越候、恐々謹言、

藤吉郎

(天正八年)
七月廿日 秀吉(花押)

亀井新十郎殿

進之

③(一五号)羽柴秀吉書狀(折紙) 縦二七・七
横四三・二

又此伯州使

從其馬ニのせ

可遣之候、

以上、

伯州表之儀ニ

付て申越候、則

先勢として

一万余申付候、

敵不退散候者、

急度各此方

より遣候者共

同事ニ可有

其次策、我等相働

可及一戦候、此方

者聽而可着陣候間、

然者其方ハ一

手ニ羽衣石ヘ

可相越候、恐々

(折返し)

謹言、

藤吉郎

(天正八年)

八月十七日秀吉(花押)

亀井新十郎殿

進之

④(一号)羽柴秀吉書状(折紙)

縦二九・四
横四三・二

我等相働候時之

為兵糧、從但州

八木千石鹿野

城江差籠候間、

可然藏ニツミテ

能々符迄付可

入置候、船より鹿

野迄之事、則

其鹿野之郡之

人夫ニとゞけさせ

候へく候、先度如申

遣候、其方ハ鹿野

城留守居として

普請用心等無由断

(折返し)

可申付候、恐々謹言、

藤吉郎

(天正八年)

九月十一日秀吉(花押)

亀井新十郎殿

進之

⑤(一九号)羽柴秀吉書状(折紙)

縦二九・四
横四四・一

追而此鉄炮之藥

人夫申付、羽衣石

可相届候、以上、

其表之儀ニ付而、木下

将監相副、人数

重而遣候、委曲神子田

半左衛門申含差

越候間、各申次第

弥馳走不可有

由断候、兵糧等之

儀申付候、委曲

神子田半左衛門可

申候、恐々謹言、

藤吉郎

(折返し)

(天正八年)
九月十七日秀吉(花押)

亀井新十郎殿

進之

※(二号)か)羽柴秀吉書状
東京大学史料編纂所
影写本『亀井文書乾』
による。

書中令披見候、

一其表弥堅固之由尤候、

殊更先度其城江敵取

寄候処ニ数多討取由

無比類候、尚以下、迄

粉骨此時候事、

一来年西国表

御働座、弥以堅相究候、

我等事、安土為越年

相上候へ共、右之趣重々

被仰出候条、其為用意、

一昨日六日姫地へ帰城候、

来春ハ、御出馬以前ニ

先我々可相働候、其通

(南条元統)
南勘へも以誓紙申遣事、

一玉藥之事、則申付、藥

三十斤、鉛三十斤、

都合六十斤之分、并

中筒式挺遣之候、雪

中弥以不都合_ニ候間、

先如此候、猶追々可

遣候、南勘へも先度

弥以右御分候間、先

少分遣候、用所次第

可申付由、從其方も

可被申届候事、

一武田家中之衆、兩

四人存分事聞届候、

不可有殊意候、来春

働之刻、知行等可

申付候事、

一近辺百姓等忠節之

在所引直候由、可

然候、是又来春働

之時、忠不忠相糺

可申付候、今少之間_ニ

候間、諸式弥堅固

被申付、万端氣遣

不可有由断候、猶

使者_ニ申含候間、不能

子細候、恐々謹言、

(天正八年)

十二月八日 秀吉(花押)

亀井新十郎殿

(表書カ)

藤吉郎

亀井新十郎殿 秀吉

⑥(三号)羽紫秀吉書状(折紙)

縦二九・八
横四一・八

尚以 御出馬以前_ニ此方

御座所普請打置候ても

先々我等相働候儀者

何時も安事_ニ候、併とても

其表_ニ敵あひこたゑ候事

在之間敷と存候間、其方次第

との事_ニ候、能々分別候て

可被申越候、敵不取退躰_ニ候者

不移時日相働可打果候、以上、

書中披見候、仍

宮吉表へ敵少々相

働候由候、於様子者先

書_ニ申遣候、鉄炮・

中筒・小筒并玉薬之

事、先度差遣候、

猶又用所候者、其方

次第追々可申付候、從

最前如申遣候、兎

角 御出馬之上にて

悉以可属一篇事候間、

端々儀者其分別て

当城之事堅可被

申付之儀專一候、

御出馬被成御急候付而

此方御座所之普請

日夜無由断申付候、

来月中旬比_ニハ

可為出来候、然者働儀

無幾程事候、其間堅固

之覚悟候段者、旧冬_カ

重慮之事_ニ候間、不及

申候、為念相書候也、何も一々

得其意、無由断申付候間

可心安候、恐々謹言、

(折返し)

(天正九年)

二月十三日 秀吉

(表書)

「(切封墨引) 藤吉郎

亀井新十郎殿 秀吉」

⑦(四号)羽柴秀吉書状(折紙)

縦二九・五
横四二・六

去十五日書中

今日廿一日到来、令

披見候、仍宮吉表

敵退散之由、可為

其分候、如被申越候

御出馬以前之事ハ

端之儀者不入事候

其城堅固之段

肝要候、就其

御出馬前ニ先々江

覚ニ候間、聽而先

(折返し)

但馬之一揆共悉討

果、從其則可為出

勢候、然者其城兵

糧之儀、兼而其分

別て相延候様ニ覺

悟専一候、其苦身候

褒美、我等出馬候而

可申付候、為其但州ニ

兵糧充置事候、

兎角今少之間ニ候条、

下々被相勇粉骨

肝要候、恐々謹言、

(天正九年) 藤吉郎

二月廿一日 秀吉(花押)

亀井新十郎殿

⑧(五—一)号)羽柴秀吉書状(折紙)

縦二八・五
横四三・三

追而令申候、其地

相残在城候武田源三郎

衆事、雜說候間

不実ニ候へ共、其身之

為ニ候条、出勢之

刻迄少之間、慥之

人質被取之、若桜ニ

成共可被置候、鳥取

遍方申承候間、如此候、

恐々謹言、

(天正九年) 藤吉郎

三月十日 秀吉(花押)

亀井新十郎殿

進之候

⑨(五—二)号)羽柴秀吉書状(折紙)

縦三一・三
横四七・四

六月十五日西表令

出馬候、無由断可

有其用意候、然者

其元路次之儀、

能々被申付まいらせ

らるへき事専一候、

恐々謹言、

(天正九年) 藤吉郎

五月廿九日 秀吉(花押)

亀井新十郎殿

御宿所

⑩(六号)羽柴秀吉書状(折紙)

縦三一・三
横四八・二

書中加披見候、

其後雖無音信候、

其方丈夫被申付候

由候間、無氣遣候事候、
然者遠路使札全

祝着候、働儀今月

廿五日相究、南勘(南条元統)

よりも使者候、其

手筈ニ候、聊以不可

有相違候、其間之

儀、弥氣遣專一候、今

迄出馬延引候事、其国

(折返し)

衆中□橋作半

軍勢乱入候者、可

為不作之由、種々理候

条、任其意候、此度之

儀、無幾程事候間、万々

其刻可令申候、恐々謹言、

藤吉郎

(天正九年)
六月二日 秀吉(花押)

亀井新十郎殿

御返事

⑪(八号)羽柴秀吉書状(折紙)

縦二八・七
横四四・〇

尚以七郎左衛門尉
参着候迄被

待付候て、其次第

此方へ可被相越候、以上、

先書ニ如申候、明日

十三日七郎左衛門可(杉原)

相越候、其次第ニ

明与介・木隼人

残置候、鉄炮之者共

同道候て、先々此

方へ可被相越候、

入見参可申候、恐々

謹言、

羽藤

(天正九年)
七月十二日 秀吉(花押)

亀井新十郎殿

御宿所

⑫(九号)羽柴秀吉書状(折紙)

縦二八・三
横四三・二

鳩五ツ瓜二ヶ

到来、令祝着候、

仍其表之儀、杉原

七郎左衛門尉相談候而、
弥堅可被申付候、

随而先書ニ申遣候

くわ其元在々へ

被申付、有次第

持セ可被越候、

(折返し)

あき候者臆而返

可遣候間、其通被

申付、早々可被越候、

恐々謹言、

羽藤

(天正九年)
七月十六日 秀吉(花押)

亀井新十郎殿

□□□

⑬(一〇号)羽柴秀吉書状(折紙)

縦二八・八
横四二・六

敵兵糧可差籠

行相催候由候、

定而船にてならてハ

入申間敷候、此方

船申付置候条、

殊堅可申付候、

(杉原)

七郎左衛門相談候而、

敵行仕候共

何時も城中ニ候て

(折返し)

可相支候、聊尔之

働不可有之候、猶

追々様子可被申

越事専一候、恐々

謹言、

羽筑

(天正九年)

七月十九日 秀吉(花押)

亀井新十郎殿

御返事

⑭(一二号)羽柴秀吉書状(折紙)

縦二八・七
横四三・七

瓜一籠并燗

統松到来候、日々

忠信令祝着候、

燗之事是又被入

(精)情被相越候、喜悦

之至候、次其表之儀

ニ付て今日以急

使申遣候、被相談

様子可被申越候、

(折返し)

何も其表之儀

諸事不可有由

断候、恐々謹言、

羽藤

(天正九年)

七月廿日 秀吉(花押)

亀井新十郎殿

御返事

⑮(一三号)羽柴秀吉書状(折紙)

縦二七・七
横四三・五

瓜一籠并燗

如書中到来候、

日々心入之段、難

申盡候、餘ニ此方へ之

音信無用ニ候、

随而其方番等

氣遣之儀、弥不可

有由断候、恐々謹言、

筑前守

(天正九年)
七月廿二日 秀吉(花押)

亀井新十郎殿

⑯(一四号)羽柴秀吉書状(折紙)

縦二七・九
横四一・九

鳩二并二籠

到来、令祝着候、

切々音信被入精

候之段奇特ニ候、仍

其城之儀、縦敵

相働候共不被取出、

城中之儀堅可

被申付覚悟専一候、

鳥取之事落居

候へハ、其外之儀ハ

(折返し)

即時ニ一篇ニ申

付事候、就其相替

儀候者、被立聞可

有注進候、恐々謹言、

筑前守

(天正九年)
七月廿六日 秀吉(花押)

亀井新十郎殿

返事

⑰(一六号)羽柴秀吉書狀(折紙)

縦二九・三
横四二・二

將亦鉄鉋の業世斤

鉛世斤自是可進候間、

たしかなるものを取可越候、

旁其元物成おそく候ハ、

かり田を仕候て、兵糧已下

丈夫可成其意事專一候、

為音信松茸并

大豆腐^か到来、快然候

毎度如此之御氣遣

祝着不少候、

其表之儀、万端

由断無之様肝用候、

恐々謹言、

筑前守

(天正九年)
八月廿八日 秀吉(花押)

亀井新十郎殿

進之

⑱(一七号)織田信長朱印狀(折紙)

縦三〇・二
横四七・〇

於因州面抽忠

節之段、尤以神

妙、弥依戰功

出雲国之儀可充

行之、別而粉骨

專一候也、

(天正九年) (印文「天下布武」)
九月七日(朱印)

亀井新十郎

とのへ

⑲(一八号)羽柴秀吉書狀(折紙)

縦二八・〇
横四四・三

書狀令披見候、敵

行之模様一書之趣

得其意候、其城へ取

寄候共、鳥取一着不可

有程候条、其間之儀

堅可被相拘兼而丈

夫之覚悟專用ニ候、

玉葉儀も度々遣候、

猶追々可遣候間、可心

安候、其元不可有由断候、
恐々謹言、

羽筑

(天正九年)
九月十六日 秀吉(花押)

龜新十

御返報

⑳(二〇号)羽柴秀吉書狀(折紙)

縦二八・九
横四四・四

(元春)(白)
吉川茶磨山

着陣付而被申越

書中、何も得

其意候、其元今

少之間之儀候之間、

其城堅固之覚

悟專一候、先日

御朱印進之候、

有御頂戴各へも

被見之、被勇尤候、

玉葉儀重而越置候間、

(折返し)

委細御使者へ申
渡候、恐々謹言、

筑前守

(天正九年)
九月廿二日 秀吉(花押)

龜新十

御返報

②①(二二号)羽柴秀吉書狀(折紙)

縦二八・五
横四五・二

尚以其表ニ一日陣

をもちかけ間敷と

存候、とかく当陣

果候てハ被引退

間敷と取にけかまへ

たるへきと存候、返々

其元氣遣も二三日

中たるへく候間、得其意

城を不出ニ可被居候、

不審なるものハ城中へ

被入ましく候、

御折紙披見候、

仍吉川事、当陣

可相果付而、羽衣石

表を引取ため

橋津へ令陣替と

推量候、自然其

表へ一日手遣ニハ

相動、それをしほニ

可引取候、若其元ニ

一日も於陣取者、其方

城ニ火をも付候はんなど、

調略在之物ニ候間、

其用心候て、城ニ堅

可被居事專一候、
何も家中不可有
由断候、恐々謹言、
(折返し)

可被居事專一候、

何も家中不可有

由断候、恐々謹言、

羽筑

(天正九年)
十月廿日 秀吉(花押)

龜新十

御返報

②②(二五号)羽柴秀吉書狀(折紙)

縦二八・九
横四五・八

将亦 御出馬不

可有程候条、其元無

越度様ニ可被入精候、

次聽而安土へ参上候ハ、

切々一人も飛脚以下も

被越事無用ニ候、以上、

年頭為祝儀

太刀馬并雁一

贈賜候、別而祝

悦無他候、猶永日

可申置候、猶安威

五左衛門尉可申候、委曲

(使)吏者ニ申渡候、恐々

謹言、

筑前守

(天正一〇年)
正月八日 秀吉(花押)

龜井新十郎殿

御返報

②③(二二号)羽柴秀吉書狀(折紙)

縦三一・九
横四九・七

早々飛脚令祝

着候、此表之儀すくも

(冠山城)
塚の城去月廿五日ニ

責崩、始城主首数

三百余討果候、同取

巻候かわやの城之

事、水之手迄責

詰、去二日ニ是又落去候、

其競を以か茂の城

端城乗崩、悉令

放火候、并亀石之城

同日ニ帰参候、近日

令改替、何之城成共

.....
〔折返し〕

可申付候、如此所々

任存分候、弥一篇ニ

可申付事、程有間

敷候、尚期後音候、

恐々謹言、

羽筑

〔天正一〇年〕
五月六日 秀吉〔花押〕

亀井新十郎殿

御返報

②④〔二四号〕羽柴秀吉書状〔折紙〕

縦三〇・九
横四八・八

先度者被罷上

見参ニ入満足候、

其城之儀境目

之事ニ候間、弥丈夫

覚悟專一候、兵糧

等之儀、五百石も

善淨ル可被差

籠旨申遣候、請取

候て能々可被置候、

自然秀吉此方

隙入事も可在之候、

.....
〔折返し〕

此時候間、堅固之儀

兼而申遣候、普請等

用心かた何も不可

有由断候、恐々

謹言、

〔天正一〇年〕
十月十九日 秀吉〔花押〕

〔表書〕
〔一切封墨引〕 羽筑

亀井流求守殿 秀吉

御宿所

②⑤〔五八号〕羽柴秀吉書状〔折紙〕

縦三〇・七
横四八・八

此書状共、其方

可被相届候、以上、

態申遣候、

一自然此方ニ秀吉隙之

入候事有之候条、被得

其意、伯州境目等之儀

堅可被申付候事、

一小一郎届候兵糧少々

可在之候間、鹿野へ

五百石も可被差籠候

事、

一大崎其外之儀者、其方

分別次第ニ丈夫ニ

可被申付候事、

一用瀬人質之儀、平太夫

かたへも申遣候間、被請

取候て、其方ニ成共平太夫

.....
〔折返し〕

所ニ成共可被置候事、

一其城肝心ニ候間、無油

断可有其覚悟候、此

時ニ候条、何も堅可

被申付候儀專一ニ候、

為其兼而態申入候、普

請等諸事不可有油

断候、恐々謹言、

(天正一〇年)
十月十九日 秀吉(花押)

(表書)

「(切封墨引) 筑前守

善淨坊

秀吉」

②⑥(二六号)羽柴秀吉書狀(もと折紙か)

縦一五・七
横九六・三

十一日御狀今日濃州

於大柿到来、令祝着候、

先日北伊勢へ被相越被

見及候龜山儀、乘崩

悉列首候、峯城取

卷儀、信雄様堅被

仰付候刻、柴田越前与

江北境目柳瀬へ取

出候条、則秀吉令出

馬押寄、段々ニ備人数

高山へ追上候处、荒手を

上、堀柵を相付、籠城之

躰候、併山中依為□

所、無是非弥押詰、

(紙継目)

数ヶ所取出申付、丈夫ニ

人数入置候而、隙を明

尾濃手置等為可申付、

去十六日濃州至大柿

相越候、然ニ北伊勢峯

城并神戸兩城落居候、

何も従表一篇ニ被仰付

候之条、至安土被助御馬候

我らも頓姫路可令帰

城候条、於□□者可御心

安候、其方境目儀候条、

猶以不可有由断候、恐々

謹言、

筑前守

(天正一一年)
卯月廿日 秀吉(花押)

亀井流球(守殿)

②⑦(二七号)羽柴秀吉朱印狀(折紙)

縦三一・七
横四八・八

為音信遠路被

示越候、祝着之至候、

仍当表事、家康

小牧山ニ居陣候間、

拾四五町ニ押詰

陣取候、急度可

討果候間、可心易候、

尚追々可申候、恐々

謹言、

筑前守

(天正一二年)
卯月十日秀吉(朱印)

亀井琉琳守殿

②⑧(二八号)羽柴秀吉書狀(折紙)

縦三一・二
横五〇・二

態申遣候、仍

此中永々残

置毎日の普

請苦身共候、

然者早々罷歸

可相甘候、為其

染筆候也、

(天正一三年)
五月八日秀吉(朱印)

亀井流球守殿

②⑨(二九号)羽柴秀吉朱印狀(折紙)

縦二九・八
横四七・二

為音信、鮭

一尺到来、令

祝着候、猶安威

五左衛門尉可申候也、

(天正三年)

閏八月廿三日(朱印)

羽柴五郎左衛門尉殿

③①(二三号)羽柴秀吉朱印状(折紙)

縦三一・六
横四九・八

就伯州堺目

儀罷越候由、從

善淨かた申越候、

打続辛勞共候、

猶善淨坊可

申候也、

(天正二年頃)(秀吉)

九月十二日(朱印)

(タ)

亀井流瑠守殿

③②(二九号)豊臣秀吉朱印状(折紙)

縦三二・二
横五〇・〇

九州江出勢之

儀も可有之条、

陣用意申付

可相待候、定日

重而可被仰出候也、

(天正二年)

八月十五日(朱印)

亀井琉球守とのへ

③③(三二号)豊臣秀吉朱印状(朱印)

縦三一・二
横五〇・三

菱喰一到

来、祝着候、尚

増田仁右衛門尉可

申候也、

(天正二、一五年頃)

九月十六日(朱印)

亀井琉球守とのへ

③④(三二号)豊臣秀吉朱印状(折紙)

縦三一・九
横四九・三

為音信鮭

三尺到来候、

誠遠路之懇

志悦思食候、

猶増田仁右衛門尉

可申候也、

(天正二、一五年頃)

十一月十五日(朱印)

亀井琉球守とのへ

③⑤(三三号)豊臣秀吉朱印状(折紙)

縦三一・九
横四九・八

為歳暮之

祝詞、太刀一腰、

馬一疋、小袖一重

到来、悦思召候、

猶増田右衛門尉可

申候也、

(天正一五、一六年頃)

十二月廿八日(朱印)

亀井武藏とのへ

③⑥(三〇号)豊臣秀吉朱印状(折紙)

縦四六・一
横六六・四

因幡国之内気多郡

宅万参千八百石事

令扶助訖、右之内貳千
八百石無役、残而壹万
千石之分五百五十人
軍役可相^(勤)勲候也、

天正十七
十二月八日(朱印)

亀井武藏守とのへ

③⑥(三四号)豊臣秀吉朱印状(折紙)

縦四六・五
横六五・九

去月晦日之書状
令披見候、其元
檢地等事、無由
断由尤候、能々
相改候者、岐阜侍従へ
被下候条、則帳共
可引渡候、所務之儀、
岐阜侍従より可申
付候、随而桶杉舟ニ
可造木候者、相尋候て
書付可申候、御用之
時可被召遣候、河端

(折返し)

海際へ道何程有之
通可書付候、猶木下
半介可申候也、

(天正一九年)
九月八日(朱印)

亀井武藏守とのへ

③⑦(三五号)豊臣秀吉朱印状(折紙)

縦四六・二
横六六・四

去十日書状加披見候、
殊狩取虎到来之、
誠希有之事候、別而
悦恩召候、即京都へ
被差上候、次其方手
前昼夜無由断令
在城之由尤候、度々如
被仰出候、来三月可
被成御渡海候間、其中
弥堅固申付可相待候、
聊尔之勤不可仕候、猶富田
左近将監、長東大藏太輔
可申候也、

(文禄元年)
十二月廿一日(朱印)

亀井台州守とのへ

③⑧(三七号)豊臣秀吉朱印状

縦四五・五
横六六・三

急度被仰遣候、
一度々如被仰出候、三月
より可被成御渡海候、然者
其国在陣面々舟
儀早々此方へ可差
越間、被仰遣候、到来
次第先御人数兵糧
被遣、二番めニ可被御
渡海候、可成其意事、
一面々兵糧多蓄候者ハ
可為手柄候、左候とて兵糧
無所持候を有之やう申候てハ
可為曲事候、然者何迄之
兵糧有之通、有様ニ
書付、当分人数儀も
軍役程無之候ても不苦候、
是又手前有合候分

(折返し)

書付出候て、毛利兵橘・

早川主馬自手前可

請取事、

一可被成御渡海間之儀、

聊尔動仕間敷候事、

(文禄二年)

正月廿六日(朱印)

亀井台州守とのへ

③⑨(三八号)豊臣秀吉朱印状(折紙)

縦四六・五
横六七・五

迎船式艘相越尤候、

浅野左京大夫人数

兵粮被遣候、釜山海へ

上置、又頓可差越候、

次生雉二到来、悦

思召候、随而御渡海候様子

并兵粮之儀、浅野彈正ニ

被仰舍候、其元之儀

弥以不可由断候、猶

長束大藏大輔可申也、

(文禄二年)
二月廿三日(朱印)

亀井武藏守とのへ

④①(四一号)豊臣秀次朱印状(折紙)

縦四六・六
横六六・八

為見廻被仰

遣候、其表長

陣之事寔苦

身之段被察思

食候、仍帷二被

遣之候、猶重而

被仰越候也、

(文禄二年頃)(印文、豊臣秀次)
卯月九日(朱印)

亀井武藏守とのへ

④①(三六号)豊臣秀吉朱印状

縦四六・四
横六七・四

今度蔚山表へ相動、

於彼湊口番船壹艘

切捕、船中者悉刻

首候由、粉骨之動手柄
無比類次第候、就其

御仕置之様子以御一書

被仰遣候、其方事者舟

手衆ニ相加可_レ在城候、

猶浅野彈正少弼・黒田

勘解由可申候也、

(文禄二年)

五月朔日(朱印)

亀井武藏守とのへ

④②(四三号)豊臣秀次朱印状(折紙)

縦四六・六
横六六・七

東門二籠到

来、早々志之

事、別而被悦

思食候、猶熊谷

大膳大夫可申候也、

(文禄二年)

五月廿一日(朱印)

(印文、豊臣秀次)

亀井武藏守とのへ

④③(四二号)豊臣秀次朱印状(折紙)

縦四六・二
横六六・八

雖無差事

被仰遣候、仍其国

永々在陣苦

身之段、不被及

是非候也、

(文禄二年) (印文豊臣秀次)
五月廿六日(朱印)

亀井武藏守とのへ

④④(四〇号)豊臣秀吉朱印状(折紙)

縦四六・二
横六六・七

西伯耆国之内

日野山ニ銀子出

来之儀、見立段

尤候、早々為掘之、

有様付記、御公用

令取沙汰、可運上

之候也、

文禄四
卯月三日(朱印)

亀井武藏守とのへ

④⑤(三九号)豊臣秀吉朱印状(折紙)

縦四六・四
横六六・九

長々在陣辛身(マツ)

不被及是非候、仍帷一

被下候、令着弥可入

精候、就其御仕置等

儀、以御一書被仰遣候、

猶熊谷半次・水野

久右衛門可申候也、

(慶長三年か)
五月朔日(朱印)

亀井武藏守とのへ

5 亀井茲矩願文（年月日不詳、天正（慶長か）

南瞻普州之中、

日本國山陰道、

因幡之國鹿野

河内鳩林山、今

日金銀湧出之

初也、末代富貴、

日本第一之寶

山、予子孫繁昌

之國、於天下驚

耳目、應成金銀山、

願茲一筆、奉神

應所也、

天神

地神、掃惡挽善、

万福奇瑞、奉謹

拜所明白、敬白

7 亀井茲矩書狀（↓大泥国大王 慶長十五年八月二十二日）

日本国源家康小臣亀井武藏守奉書

大泥国大

王臣足下先□到

貴国日本賊徒成不儀因是

貴国與此國為不通 暹邏国王

貴邦與日本商船通達事申分其趣之由在於返書之間

今通商船者也以來惡事無之予船堅固令下知畢萬嘉

從 暹邏國可有啓祥也

亀井武藏守

慶長十五庚戌年八月二十二日

(印)

茲矩（花押）

11 亀井家歴代書狀（卷子装六卷／＼四十八通／＼）

△第一卷：亀井茲矩自筆書狀（九通、卷子装）（年不詳）

① 亀井茲矩書狀（↓野伊・布源・多宗 年不詳正月二十九日）

以源一亀

一其元へ卜書申付ニ、内々可罷下と存候処、近日咳氣を仕候間乍存延引

申候、爰元へ御礼之義承合申候て急度可罷下と存候 一最前も度

々如申下候、御普請之儀可為来十五日候間、皆々被上候事不可有油断

候事

一在々耕作之用意仕、無荒田様ニ可有御心遣候事 一新作申候大船

をハ可被買候、中之舟をほしかり申候や候、何ほとつみ申候や我等い

また見不申候、何ほと大工・鍛冶等迄造作ハ入申候や、一そうく
の算用日記を重而可為候、又只今何ほとに買候ハんと申者候や、様子
承度候事

一先度も如申下候、地下之未進方之儀、御普請衆ニ出して、それにてな
し申候へと可被申付候、少分未進可有者ハ、一ヶ月二三日成共、ふし
んに上候て成共、調候へかしと存候、六七月之比まで毎月にわけて上
候へかしと存候、一度ニも不入候、くはり合て上申候かよく候、未進
をハさやうに仕候へと可被仰聞候事

一今年ハ北国も米カ稀ニ候と申候間、其元米之ト去年納方借米之畠方迄
之算用して、早々可為候事

一我等罷下候て、算用を可仕と存じ候へとも、もしいまのことく咳氣に
てハ、罷下候事延引之儀も候ハん間、算用之書立可為候事

一此方へ佗言ニとて上候儀不及是非候、皆々ニあき申て、はなし申立も
無之候、御公役ハ多成申候ニ各々の御手前を我等仕うめ申事カ迷惑ニ
て候間、とかく御心中ニまかせられ候へと申候、いつれ成共御望之次
第、状を可進入と申事ニて候、別ニ只今我等懸御目候とて、思案無替
事候、路錢之入申候ニ無用と可被仰候、我等別ニ人を置申事無之候へ
ハ、我ほとも不入候間、いつれ成共我々も御座候へと可被仰候、御普
請も無之手寄に成申候ニはなし申ても無之候、能々可有御分別候、恐
々謹言

正月二十九日

長卿(花押)

「野伊
布源
多宗

長卿

②龜井茲矩書狀(↓野伊・布源・多宗 年不詳三月十一日)

(端裏)
「多宗

野伊 参

長卿

御中間にて下、御返事相待候、

從大坂」

万用之事共、孫兵へ差下申候、定而又甚五はしにて候ハんと存候

一其郡当関之儀、百姓手前をよくくきはめて書立候て、此方へも
可為候、地下へも其通を書て判をして、其在所くへ可被渡候、自然

依鉢当秋田之儀をも見せ可申事も候ハんと存候事

一爰元銀子無之条、石州の銀を取ニ人を被遣候て可有御上候事

一石州之押米の事、石州の奉行衆へ理を可被仰候、能々被薦候て、返事
可為候事

一今年の御ふしん、一段大石にて迷惑にて候、昨日太閤様御ふしんはへ
被成御出候て、我等角石も被成御褒美被加御詞候、忝候、各うらやま
れ候仕合にて候条、可御心安候事

一此瓜種の事、名譽のにて候間、態下申候条、よくく入念作候へと梅
木ニ被申候て、丹後不稔やうにして作候へと可被仰候、三色にて候事

一くこ、おこきの葉をむして、ほして、廻舟にて可為候、態と人をかけ
て可有候儀も此方之賞翫にて候条、申事にて候事

一大昌丸罷上候時、のり物入可申候間、さゝせられ候へ、居たけのつか
へす候はとに、かうく／＼とさゝせ候て、御座へたゞみの面にてつゝみ、
くれ竹を以てふちをうち、かみのことくにして金物もくろかねにして、
当世の駕のことく仕候へと可被仰付候、ほめき不申様ニ可被仰付候、
諸事中国やう、ほめき無用にて候事

一廻舟之事、出申候や、当時入申候物、上荷ニ可有御積候事

一大昌丸、くらの下ぬりの事、何とて延引候や、早々此方可有御上候、
勿論我等くらは去年より申付候へ共、油断にて候事

一文虚罷下候時、こま／＼と申下候とも申忘申候や、遠路之事、又去年
ほと、我等気根無之候間、算も成ましく候、去年のほと申下候へ共、
何事も存やうに無之候、源左・忠右かひにて候や、諸政道専一ニ候事
一大昌丸かこも入念候て早々ならひ申候へと可被仰候、天晴一夢不断被
詰之やうに可被仰候、今事の間にて候条かこ専一ニ有候事

一秀頼様、御鳥ニすかせられ候間、をし鳥をくし網にてとらせられ候へ、
人をかけてとらせられ候て可然候、深山ニ子を生申候間、山ふかき洲
の鳥ニ網さし申て可被仰付候事

一たうの子を堀内殿と約束申候へ共、去年も風吹落候とて高山とり不申
候、高山殿去年不出来さも／＼不及是非候事

一くまたかの子を其元にてかひ立候へと可被仰候、たうの子ハ日置勝部、
朽候もうみ申のよし申候事

一其元ニかひ申候かりかねをもよくして可被置候、此方にて進上物可然
候事

一大昌丸上申候時の用を無油断可被仰付候事

一まへかるとに早々人を可為候、さのみ道ニきようさんの事、きらひにて
候、たれとなくそろりと通し上候事可然候事

一大昌丸上国の日取、左右を承候へ、迎をさし下可申候事

一爰元、舩のこま／＼の物、文虚書立、又其元ニ最前我等申置候物、廻
舟ニ可為候、廻舟みなく／＼仕立候て、順風次第可有御遣候事

一四月ニ成申候へ、とうせん坊の風道候て、出船可然候事

一大昌丸罷上候事も杉本坊へ吉日にて候とも、雨風なれハならず候間、
来月中、二日も三日も吉日をえらみ、其日雨風ならハ延てと御取候て
可然候、其分別専ニ候事

一右ニ書立、又最前文虚孫兵書立、不可有御油断候事、以上

三月十一日

長卿（花押）

多宗

野伊 まいる

③亀井茲矩書状（↓野伊・布源・多宗 年不詳三月十四日）

〔端裏〕

〔多宗〕

野伊 まいる

長卿

猶々爰元之仕合能候、一昨日しゆす一巻あて豊前殿なども、おなし

やうに被下候、米を早々可有御廻候、くれ／＼はかね有御下候、鉄をも可被廻候、其外こま／＼の用、源右衛門申用之物可被廻候、以上

又申候、大昌丸上候時、秀頼様へ進物ニ珍鳥能候、をし鳥を二番三番計り何とそして取候て可進上候、不可有油断共、高山日夜付候て入念候へと申置候、高山殿近年甚疎略無極奉存候、其段申置候、又追而其旨可申候、以上

此作兵衛暇を上候申候間遣申候、然者用之事共、一書上ケ申下候、

一爰元八木高直ニ成申候間、廻舟之事可被急候、卯月とうせんの時分可有捨候事

一大昌丸上國之事、先度も如申下候、杉本坊へ被尋候て吉日を二日可被取候、若風雨之日可被延引候事

一此地はかね銀一文目ニ老貫目売申候間、重而鉄おし申候へはかねに成候と仕候へと可被申付候、去年のはかねを先廻舟ニ早々可給候事

一油をもしほらせられ候て可被廻候

一魚ノ油ふくなどにも多のよし申候、可被仰付候事

一らうそくをかけ候て、箱ニ入て可被廻候事 一子林所ニ杉原をす

かせ申のよし申候間、すぎ板にてはこをさ／＼せて、是も廻舟ニ可申付候事 一小林杉原かひたなとすぎ申候事、多出来不申候由申上候、

よきかはの分をハ杉原かひたに早々申付候へと可被申付候事

一小林多ん消やき申候事、はや暖ニ成申候間、無用之由可申旨候、第一

耕作之時分ニて候間、薪なと申付候事不成候、其段可被仰付候事

一荒田之事、帳除古写より被申上、青尾、やうかう、かちみのさわの分、存之外少分之由候、もとひらき申ものにて候間可然候、只今何反幾敵と主ニ引合、竿をあてゝ可被渡候、来秋其近所皆竿をあて可申候、開そへてたまり申候百姓も可有之候間、去年之田ひらきそへたるものゝそはの田までもかくし申候へ、田にうちて隣田に年貢を出させ可申候、勿論其隠田之荒田開候分ニ三年之納所可申懸候間、只今我と申出候へ、去年一年之納所斗ニてゆるし可申候、かくし申て秋竿の上ニて廣候へ、政所も田主も首をきり可申候、其段よく／＼可被申聞候事

一畠等之儀、去年もかた／＼斗作申候畠多候間、両毛作申やうに多畠を持申候百姓の手前を少分之者に取て可被渡候、両毛不作之畠をハみな取あけ候へんと堅可被申渡候事

一銀子無之候間、石州之之事ハ可被上候、最前之公事米之事、奉行衆へ理之状を可被下候、綿屋与左所へも米を其方之蔵ニ置候へハ、石州御奉行衆被押取候由如何仕たる事ニて候やと状を書いて、其状をも彼奉行衆の状と一所ニ奉行衆へ可被遣候、急度可被仰候事

一鉄なかし申候事、いかほとなかし御出来候や、かんしよ何ほと出来候や、人ハ何ほと来候や、竹内甚五所より申上度事ニて候、甚五橋をかけ申候や、なかし山の事無左右候事

一上野ニ先度之者家を作申候也、今二三間も作申候ハ可被置候事

一先度之状ニ様々用事申下候、一々可有分別候、一度見申候へハ忘物□

然をかけて可有御覽候事

三月十四日

長卿(花押)

④ 亀井茲矩書狀（↓野伊・布源・多宗 年不詳卯月朔日）

猶々大昌丸事々中敷ニハ其元置申候ひろうとうのくろきを仕立候て、しき可申候、勘助□□候事

清兵へ小者さし下申候

一 大昌丸罷上候吉日廿二日之由能時分ニて目出度候事

一 廻舟未御上候事

一 舟積物書立請取申候、はかね無之候て石わりのみさきならず候間、跡舟ニくろかねもはかねも有次第可有御廻候事

一 十文字之鍵下申候、はかねをして、石つきをし、ぬりをもして、さやハよく候、其ま、ぬりなをし、さひをも落し候て、大昌丸かもちやりにて可被下申候事

一 長刀と鍵迄可然候、手鍵をハ此方ニてこしらへ可申候事

一 石州へ米を被下候事無用ニて候、十一文ニてハ可被下之由申候へとも先下申候米斗を被賣候て、只今ハ被下候事無用ニて候、爰元の米高直ニ可成と推量申候、追而左右を可申候、爰元ハかうちん二分ニつみ可申と申候間、只今約束申候て廻可申と奉存候事

一 地下へかし米の事、先百石ほと可被借候、田ニうちて可被渡候事

一 廻舟ニ被積米、辻つみ何ほと用意候て被渡候や、其書付追而可為候事

一 しは可被買候事

一 大昌丸小袖帷など之事、二三日中人を下可申候事

一 たうのふしんの事、出来候や、いそき候へと可被仰候事

一 もつなととらせられ候て可被置候事

一中津へ如去年みちかくれを二三百荷ほと御あらへ候て可然候事

一 大昌丸やかて可下候、きつ付のくつ、由緒手など可被申付候、しりかいをハ此書ニて品々下申候事

一 重而の廻舟ニこま斗のあふら可為候事

一 先々廻舟、三そうのつみ書付ニ石州綱何とて無御積候や、不及是非候、是をこそ此前も細々申下候へ御油断さたのかきりニて候事

一 はや此方ニ無御座候間、舟ニて上候かと相待申候へハ積書付ニ無之候、今其元ハ出候舟ニてハをそく候はん間、駄ちんを入れてくらを可有御待せとの事ニて候也、御失念も事にハ申候、此分ハ石ふしんを仕候、内に被居候衆中ハ南風の時斗正念か付候ハんと存候、今度廻舟ニ石綱を忘候ほとのはれ事ハ有間敷候、中々無申事候事候

一 此方ハ申下候事ハ、不立用候条其元ニての分別手むき斗ニて候、石州のやすき所へ米を下うりすてられ候事無用ニて候、御同心ニて候ハ重而可申下候、石綱事ニ腹立申候間申下間敷かと奉存候

一 孫兵衛ハ石の事ニ綱の入り候事を不存候や、以上
卯月朔日 長卿（花押）

多宗

野伊 まいる

⑤ 亀井茲矩書狀（↓野伊・布源・多宗 年月日不詳）

平三と久蔵からの□□いつも拝見候

一 大昌丸上国之儀廿二日之由候間、其心得をいたし申候、用意して可被

遣候事

一こしを似合候やう、此前如申下候、さゝせられて可然候、于今無用意のよし不及是非候、そとをへうは筈にてつゝみ、くれ竹をため、くはらニとまで書下候へ共、于今無用意と兩人之者申候、何として延引候やの事

一こしの事、うつくしきとてうるしなとにてぬり申候事ハ無用にて候、

爰元はやり申候こしのこくとくに可然候事

一石引綱無之候、舟にて可給候、先舟ニハ何とて不被積候やらん、不審ニ候事

一爰元居申候未進夫之事、替ニ□被送候、未進の日数ほと人々被

申候て上のよし又ことしも未進有之候ハ其身を可被上候事

一大昌丸上候はん時ハ人足未進之夫、替を可被上候

一替ハまたせ候て可然候、うち添候事不可然候事

一田島無荒やうにと細々申下候

多宗

従大坂

長卿

⑥ 龜井茲矩書状 (↓野伊・布源・多宗 年不詳三月十一日)

あねの泊の者におなし百姓か、米をかし申のよしにて催促仕のよし候、其名をきゝ候へと申付候、我等借物田島麻など申さま、未進をハ仕候て物を持ふりにかし申候事大なる盗人にて候間、此久蔵ニ申聞候間、かしてのかたに我等へ出申候未進の分、算用にて引付可被取候、然者

あねのとまりの者の手前をも算用候て、出分にてハ出させ直ニ此方へかしてのにして可被取候、惣様大坂つれの者、未進をおこしさんたん候て、一せき可被申付候、にくき申事にて候、以上

三月十一日

長卿(花押)

野伊

布源

多宗

参

⑦ 龜井茲矩書状 (↓野伊・布源・多宗 年不詳九月九日)(前欠)

一わた三貫目可被上候事

一うるし二合ほと可被上候事

一舟の儀、何艘出来候やの事

一秦の法度やふれ候のよし、おはなとのゆるしにて候やの事

一さけ、かも進上可仕候間、可被上候事

九月九日

長卿(花押)

三人の衆 御返事

⑧ 龜井茲矩書状 (↓野伊・布源・多宗 年不詳十二月十三日)

一やくらの木なと其ほかさしつを仕候は、三右衛門ニ渡し申候

一材木之事を興江、小畑へ之者ニ申付、山へ上、木なとをきらせ候て可

被置候事

一来年御役之事ハ半役とかき出候、百三十五人之御役にて候之間可有其心得候

一百姓等も来年ハ夫に立可申候材木にかゝり可申候、委ハ三右衛門ニ可申候

一河内之者共も材木をとらせ可申候事

一なかくふしんの事、油断なくなく申候へと木部方へ可被申渡候

一木をきり候事、なかくきり候事も四角ニても三右衛門ニ申聞候

一木をきり候奉行ニハ、当度ふあんの者をゆるし申候、善四郎、又其ほかゆるし候衆中ノ者を奉行ニつけ候てきらせ可申候事

一小性へやノ材木を半左衛門ニかい候へと可被申候、三右衛門、委存候、諸事緩なく可被申付候、以上

十二月十三日
長矩（花押）

〔瀬由大へ〕

長矩

⑨亀井茲矩禁制（↓野伊・布源・多宗 年不詳九月）

希屋村

竹木山林他、一ならさるぬすみきり見合申候へ、からめ、しかのへ可

申趣候、もし知人にてわたくしにゆるし申候へ、其人を重而聞出て可

申付者也

九月 日

長卿

△第二卷：亀井政矩他書状（十通、卷子装）（慶長十九年～元和二年）

①亀井政矩陣中法度（慶長十九年十一月十五日）

〔御陣法度之事〕

〔そなへ、乱に仕間敷事

〔を立有之所へ、余にそなへ候者、入〔弓頭、鉄炮頭近所

にて打放可有事

〔之所、馬印のもとを見合、其さいニ可事、若さなき者ハ、馬

乗ハ当座ニ領知を可召上候、下々ハ板打可仕事

一陣中にて馬を取放候ハ、領知可押儀なり、其中間、法度ニ可申付事

〔知ニ鍵を合、雖為高名、腹をきらせ〔打放、其主人之領知可召上

事

一陣中、何にても勝負仕候ハ、腹をきらせ可申付事

一そなへにて高はなし・高声仕候ハ、横目次第ニ馬乗ハ馬を召上、侍

者刀を取、下々ハ可為切捨事

一於軍陣直ニ可申付之所、以使番申渡候共、背其意於令惡口ハ、当座ニ

可為板打事

一むさと陣払、又隣所、隣郷へ火をかけ不申付ニ乱妨仕間敷事

右条々相背間敷儀也

慶長十九年

十一月十五日

政矩（花押）

②立花宗茂書状（↓亀井政矩〔慶長十九年〕十一月十日）

以上

去月十六日之御状、今月十日到着令拝見候、如仰於伏見得御意本望奉
存候、此方無相替儀候、大御所様も被成御鷹野、于今御逗留候事候、

今度於大坂表之儀共御改御座候而、何も不殘直ニ被為聞候、佐州ハ煩候て無出仕候、大隅殿へ御手前之儀も拙者右之通ニ申候、可御心安候、佐州指図次第御越之由候者、得御意候、恐惶謹言

十一月十日

立花左近

宗茂(花押)

亀豊州様 御報

③龜井政矩書狀(↓加藤理右衛門他 [慶長十九年]十二月二十二日)

以上

菅屋吉右衛門、勝田新丞兩人差下候事

一所務之儀、手堅申付候へ由、兩人ニ懇々申渡候間、其旨を書候而、印判を遣候、是ハ代官政所百姓へ見せ候へんためニ候、兩人之者、定而可為其分候事

一御城中弥々隙ニ成候而、昨日ハ鉄炮もとまり、大御所様 御誓紙被進候由候、御袋様も先年内ハ寒天候間、江戸へ御下被成候事御誓無用之由候、何も御人質ハ出不申候、御知行、もとの御持かゝり之分被遣候、御城をハ桜之御門外をわり申候由取沙汰候、又今度牢人共此申候惣くるわ斗をわり候て、御城ハもとの分之由、其取沙汰も有之候、大御所様 ハ廿六七日之比、京迄御開陣之由候、当將軍様御開陣之定日は知不申候、乍去当年中ニ伏見までハ御開陣之由候、寄手之諸勢ハ先手之衆ハ骨をおり、竹たほを付、堀より老式間までニ寄候而御口被成候間、不入苦勞をめされ候かと見え申候、上方者ニハ拙者老

人之満足いたし候、寄手衆ハ□□察入候て、先万歳衆をうたひ候事也

一所務之事、無油断可申付候事

一鉄炮之衆あへさせ可申候、又候哉、天下之兵乱もちかつき候由、諸人其沙汰をうたひ候間、只々衆を無油断合させ可申候事

一熊介、西丸へも小袖下候間、如注文又可相渡候事

一諸大名へ御暇出候ハ被罷下候共、拙者ハ少跡迄相詰可申候間、各へ音信ニ仕候物上可申候

一ともしまのぶり、雁、鴨、ます、のり上せ可申候、のりしはからくなきやうニ可申付候事

一はななみ、色杉原、此等上せ可申候事

一佐渡殿ハ相断候而、只今まで年を仕候共馬乗共差下可申候事

一鉄炮之者、留主ニ米を少つ、見合候而借可申候事、

右之分、無緩可申付候、上せ候へと申遣候物之分、無油断早々上せ可申候事、以上

十ヶ条也

十二月廿二日

政矩(花押)

加藤理右衛門殿
湯 木工允殿

④多胡主水他書狀(↓新庄九郎介 [慶長二十年]卯月二十六日)

猶々、ひやうこへハ何も西国之衆、御陣まかなひニ人数少しつゝの

こしおかれ候而、つきあひまてにて御さ候間、山方を陣取可申と存候、以上

急度致言上候、今日廿六日すままで参着仕候、ひやうこ作州衆被陣取申候てつまり申候間、明次第二可罷越候、又池田源左衛門殿、はなくま山方ニ陣取被申候由申候、それるすまへかゝり山方を見せニ遣し申候間、何分ニも御意承度存候、此旨御披露所仰候、恐惶謹言

未ノ刻 卯月廿六日

進上

新庄九郎助殿

多古 主水(花押)
湯 木工允(花押)
塩路 大学(花押)

⑤牧図書他書狀(↓新庄九郎介〔元和元年〕六月廿三日)

以上

態以飛脚申上候

一去十八日ノ御書、同廿一日ニ謹而致拜見候事

一大坂落人せんさくニ付而、其許に籠下候衆ニ多胡半右衛門、藤井五郎大夫相副、家中御城下不残家内までさかし、手堅穿鑿仕候事

一落人式人からめとり、小柴六右衛門ニ鉄炮之者六人差副、今日爰元出シ上せ申候事

一山伏老人搦捕候へ共、落人之様子不相定候間、先之籠者させ申候、弥相究、重而上せ可申候事

一馬乗衆起請文上せ申、其内山中清右衛門、勝田新丞、笈田内記、奥田

本兵衛、右四人手前出入之衆候間、起請別紙上せ申候、申分之状被成御覽様子重而可被仰下候、起請ノ文牒不相違様ニ承届候間、先々得御意候、弥御せんさくニおゐてハ、様子重而可被仰下候事

一地下ノせんさくニ今日出シ申候、辻々のからみハ昨日日出シ申候、於様子ニ重而可申上候事

一惣様之起請出来次第上せ可申候事

一落人宿主籠ニ入置申候事

一大工又二郎所ニ親類由候而落人御座候を究申候へ共、前かとニ大工申聞候間、又二郎則籠ニ入置申候、宿は此等之もの共重而御左右可被仰下候事

一別紙狀一通上せ申候事

一其元様子如何、無御心元奉存候、爰弥今年ハ耕作以下、一段世中能御座候ハんと申候事

一鮎ノすし、重而上せ可申候事

一熊之介様一段御息災ニ御成人被成候、休夢様一段御息災御座候、御姫様御親子様定而はや御上着可被成と存候、此等之趣可然様ニ御披露所仰候、恐惶謹言

六月廿三日

牧 図書(花押)

塩路権兵衛(花押)

加藤理右衛門(花押)

多胡主水正(花押)

多胡信濃守(花押)

新庄九郎助殿

御披露

⑥ 龜井政矩覚書 (↓「元和元年」閏六月十一日)

□ 伴加兵衛

はなし申候

廣太郎右衛門

去年十月晦日、

らう人させ御座候

同五喜左衛門

者、当年 暇も遣、以上

右之者共、何方へ罷越候も不存候、以上

壬

六月十一日

龜井豊前

政矩 (花押)

⑦ 龜井政矩書状 (↓牧図書他「元和二年」卯月十八日)

態以飛脚申登せ候

一 昨日已刻ニ 御所様 御薨去被成候、言語絶候、家中者ともニも可申

聞候、かくす事ニあらず候事

一 公方様も明明日中ニ還御被成候事

一 我等事、豆州あたみニ湯治申候、一段と湯相応候、去九日ニ当地ニ越

候、在所へ成とも、江戸へ成とも、何方へ成とも、其方次第之由、上

意ニ候間先湯ニ入申候、これも成俣人殿、万事指図ニ候、上様還御ニ

其四五日御跡江戸へ下候へと存候事

一 上下心得入事ニ候、万事油断有間敷候事

一 早飛脚之者を四五人もよふして置可申候、自今以後飛脚入候へん間、

江戸節々可申遣候

一 いとのね能候者うり候へと、孫右衛門所へ申遣候事

一 鉄炮薬、人をかけ候てあはせ可申候、ゑんせうをも無之候へ、かひ可

申候

一 合薬いかほと有事ニ候や、重而申上へく候事

一 休夢へも以書状可申候へ共、いそぎ候間、不申候事

一 城中火もと万事法度をかたく可申付候事

一 当番之外へ、門よりうちへ入申間敷候事

一 天下之御定者、夏中ニ而者有間敷かと存事ニ候事

一 具ニ重而可申越候、拙者足も一段と能候而、つへにて座敷を歩候、湯

事外き候、可心安存候、謹言

十三ヶ条

卯月十八日

午刻

豊前守

政矩 (花押)

牧 図書殿

塩路権兵衛殿

湯 木工允殿

⑧ 龜井政矩書状 (↓奉行中「元昭元年」閏六月六日)

追而申遣候、御年寄衆ははこ御法度之御ふれ状下候間、其元ニて拝見可仕候、在々のいんはんのあん書遣候間、如此書候て、まはし可申候、以上

壬六月六日

奉行中

まいる

⑨亀井政矩書状（↓牧図書他 年不詳十二月十二日）

役目之ものニ可申付候

一來年爰元にて作事仕候間、鉄炮之者五十人、何之くみにてもゑらみて、普請能仕候ものを下可申候、猶肝煎式人、是も□とも廻り候ものを越可申候

一石切五人下可申候、何も二月三日ニ其元を出可申候事

一橋斗かけ候て、門戸ひらへりとして置可申候、かなりの迄も仕候ハムつかえ迄ニ可仕候、何時へり候とても□候

一爰元、長屋之作事算用、角左衛門手前其元にて仕候哉、其元にてもらち明候ハすハ、此方へ下候て能候、算用可仕候由可申渡候

一大工源大良とも十人能大工をゑらみ候て、下可申候、正月三日ニ其元を出し可申候事

一鍛冶三右衛門、是も弟子つれ候て其元を正月三日ニ出し候て下可申候事

一塗師彦右衛門も弟子つれて下可申候、是も三日ニ出し候て下可申候事

一道路、作事仕候間、正月三日ニ出候て下可申候事

一去年の爰元ニ諸々夫十一人有之候、此夫かわり□人下可申□□、正月三日ニ其元出可申候、替候て其元へ上り候て作等仕候様ニと申事候

一其元の上候大工鉄炮のものニも人足付候て下可申候、十一人之夫之外

ニ候

一□□あんと、すぎやあんとほと成を一つねの座敷□置候、ほうすき
 なるのを一□□を□□、すぎやとさしきのあんとはいかにもねんを入
 可申候、残所ハ豫念を入候へても不苦候、是も早々□月二□□同前
 ニ下可申候事

一其元米之相場、若州、石見、長州、何も相場如何ほと仕候、時々便宜
 之節可申下候、上方爰元、上方之相場之儀、木工允方可申遣候、正二
 月之米者当米払可申候事

一石ニ付十五六匁ほとニ当候ハム、米少宛成共払可申候、其上ハ無申事
 候

一杉原無之候間、此春下候杉原之とくニあつく念入候て、大かたニと小
 かたニとすかせ候て、早々下可申候、状と文とためにて候、あつくす
 かせ可申候事

一□ニ成候赤松之かわ、此方にて手間入候はぬ様ニこしらへて下可申候
 事

一白大とりの子まにあひすかせ可申候、爰元にて座敷はり候ためニ而候
 □候、つねよりもあつくすかせ可申候

一伯州市橋下総殿仰給候儀、大橋作右と請負仕、元半分ニあつかい仕候
 由尤候、百姓頭ニ市橋殿之書物などなく候てハ、たゞ口上にての百姓
 申分ハ御奉行衆へハ不被申候間、元半分ニ相済し可然候、其上承候へ
 ハ、市橋殿へハ百姓の橋なといたし候て出候由候、何とそ仕、元半分
 ニあつかい候て済し候様ニ可仕候事尤候

一給人借米、当年悉相済候様ニと急度可申候事

一讓傳寺前之河先の古川へ付水やり候様ニ仕候□、夫申付候て塩治内匠

ニ申渡、町者ニ申付候て、川普請可仕候事

一大坂之茶之こゑ、馬やこゑにて鼠入候ハ、べつこゑをおかせ可申候事

一□水上城之石垣ぬけ候由、御意を請、春ハつきなをし候様可仕候、

其内又ぬけ候はぬ様ニ石なとりこみ可申候、猶追々可申遣候、謹言

十二月十二日

政矩(花押)

牧 図書殿

塩路権兵衛殿

⑩龜井政矩書状(↓牧図書他 [元和二年]卯月二十三日)

京都へ用之事候之間、すくに其元へ指下申候事

一將軍様、明日廿四日還御之由、四五日以前駿府の沙汰候、今日迄者

營之事不知候事

一大御所様御死かひ、くのう御城へ御座候、神ニ御ゆはひ被成候由候、

何神者不知之由、桑左近右書来候、是も營者不知候事

一拙者事、湯一段相応候而座敷之内をそろくとあゆみ候、今一七日入

候ハんと存候事

一其元ハいかにも閑可仕候、御死去被成候きわに候者、下々共其心持

肝要候事

一大御所様 御死去被成候其日、江戸を米津田勘兵衛殿に慥 御死去之

由、相ふれらるゝ由候、營而是も 仰置れ候かと存候事

一段と何方も閑候事

一駿河御年寄衆中初、惣様あたまでをそり被申るゝ由候、年寄衆斗ハ尤候

か、惣様そり被申候者かつてん不参候事

一先、其元之普請をもやめ、大工遣をもやめ可申候事

一覚而其元へもよこめ之衆可参候之間、其氣遣尤候事

一藤井家、飯富才藏ニ可相渡候、平野徳右衛門家をハ竹中儀右衛門ニ可

渡候、荷舟仁左衛門家を小柴六二郎、岡本七左衛門家池田松太郎、本

木吉兵衛家永井二郎九郎、寺本市允家を平川佐之右衛門、右之者ニ遣

候之間可相心得候、則市允屋敷ともニ可遣候事

一村田小兵衛手前算用相済候由申越候間、前々如去年之切米可相渡候事

一鶏之玉子下可申候事

一鶏之尾ぬかせ可申事

一米買来候や、根之能所可遣候事

一竹之子を塩付候而わらすに下可申候事、但毎年付候か能候、如其仕候

而可下申候、と角わり候者悪敷候

一あねを振舞申候ニ餘女房多候之間、書立を下申候間、書院へ持参可懸

御目候、惣別家家中之女方ともあね之処へ参様子悪敷候、皆ひ官之事

候者、むざと一ツ座敷やなどに居不申様ニ可仕候、毎々きやうきのあ

しきは多国之者見候間、我等同前ニ可存之由、内々ニ而可為候、あね

ニも其通可申上候事

一蔵ニ長刀、ほそく、みちかく、かるきを可下申候、河田忠右衛門ニ可

申候

一早飛脚二三人可下申候、尚重而可申候、謹言

十八ヶ条

午之刻
卯月二十三日

豊前

政矩(花押)

牧 図書殿

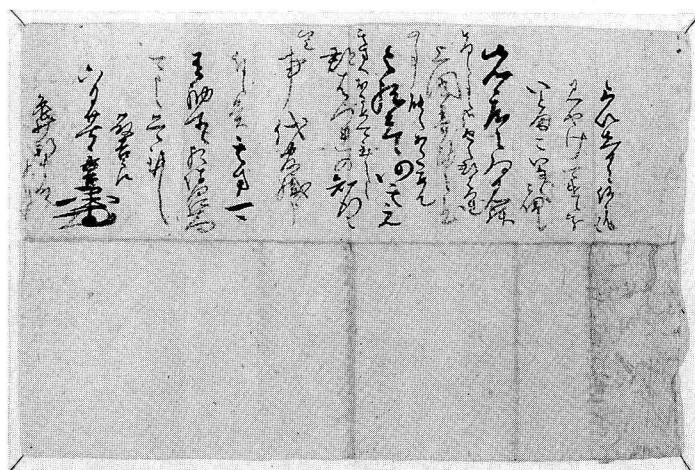
塩路権兵衛殿

湯 木工允殿

湯浅 隆(国立歴史民俗博物館歴史研究部)

小島道裕(国立歴史民俗博物館歴史研究部)

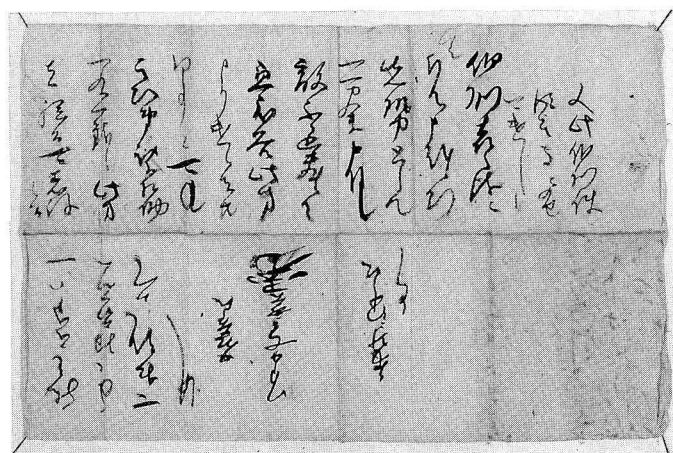
〔写真〕 ※縮尺はすべて同一である。



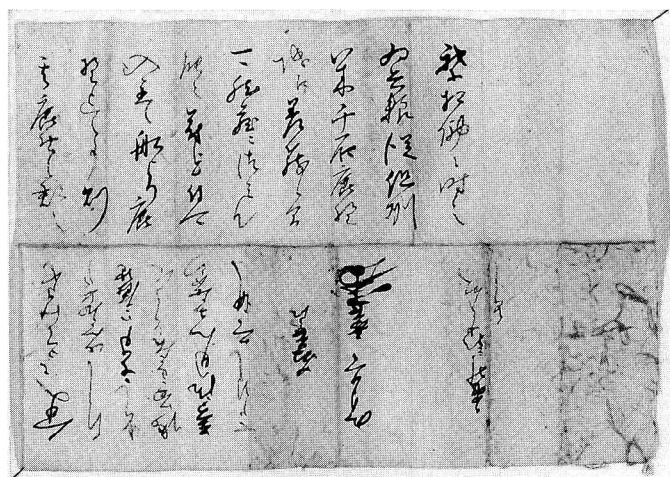
① 羽柴秀吉書状（7号）



② 羽柴秀吉書状（11号）



③ 羽柴秀吉書状（15号）



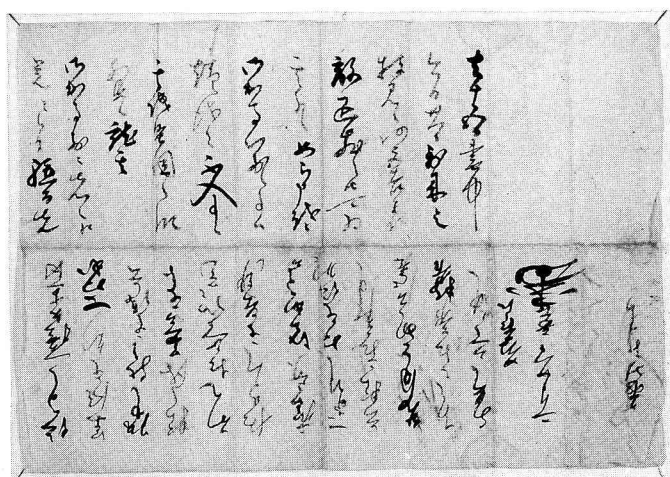
④ 羽柴秀吉書状（1号）



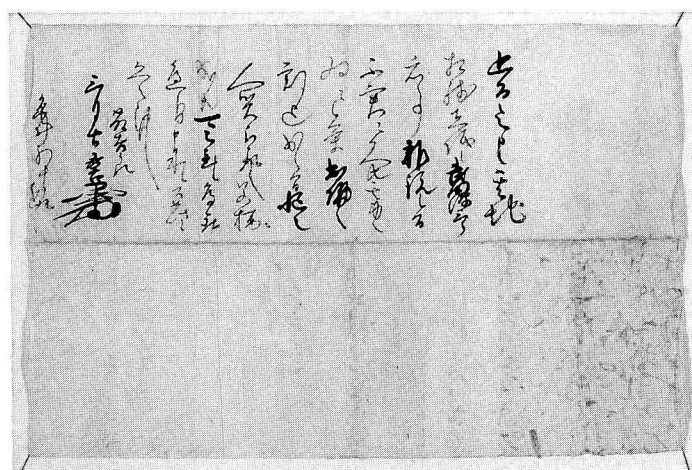
⑤ 羽柴秀吉書状 (19号)



⑥ 羽柴秀吉書状 (3号)



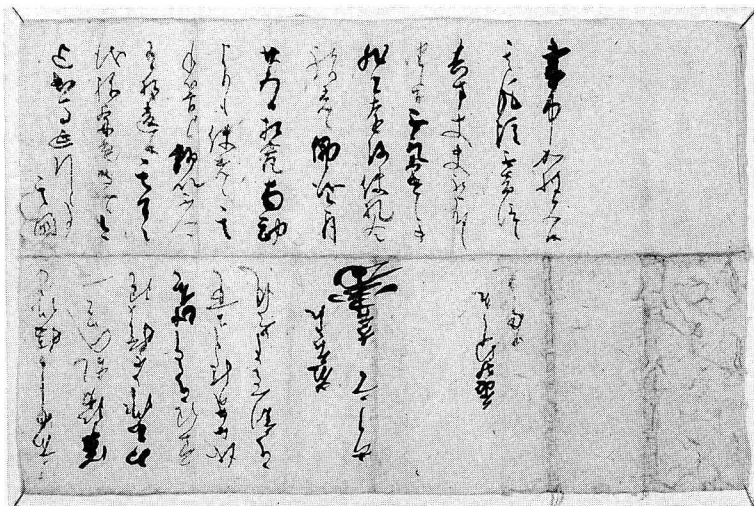
⑦ 羽柴秀吉書状（4号）



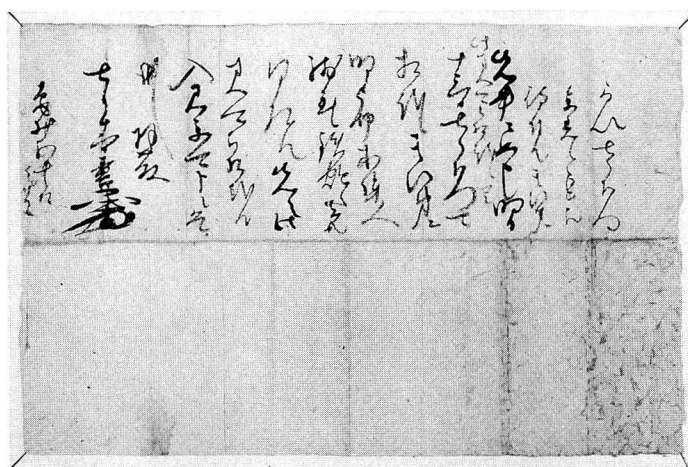
⑧ 羽柴秀吉書状（5—1号）



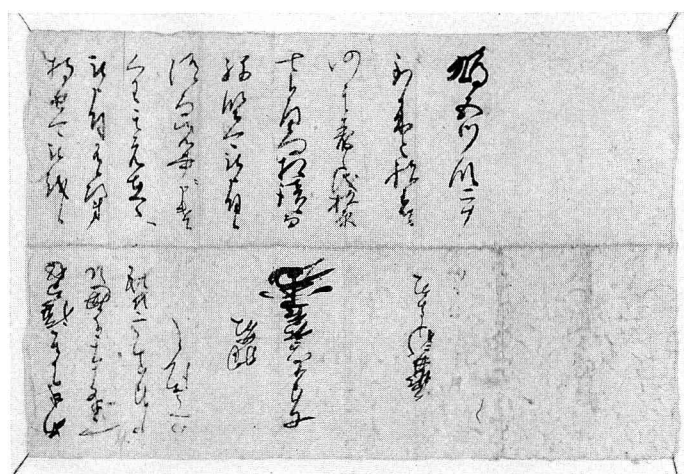
⑨ 羽柴秀吉書状 (5-2号)



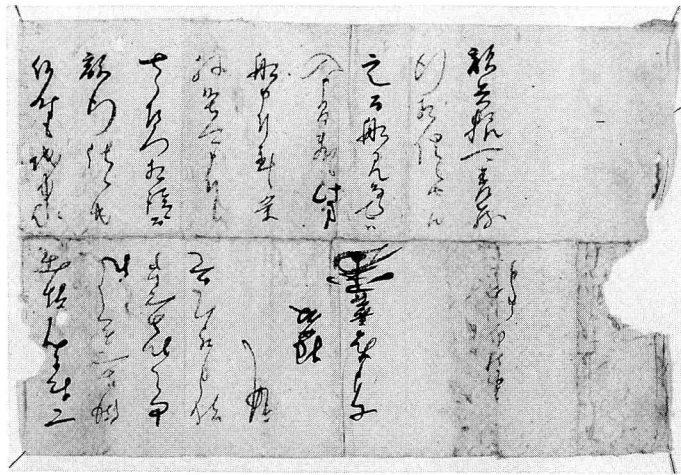
⑩ 羽柴秀吉書状 (6号)



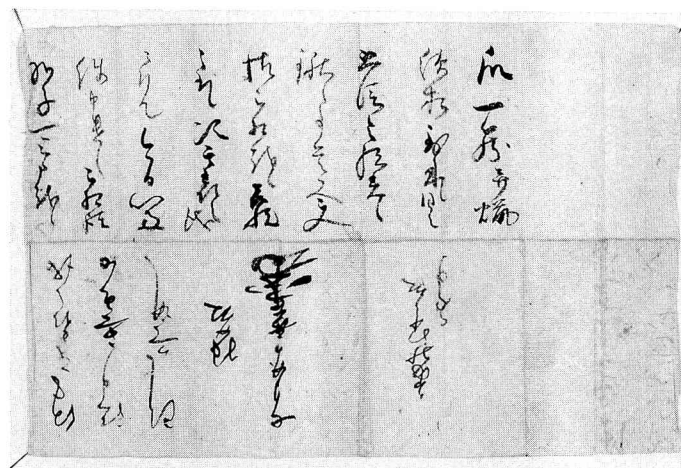
⑪ 羽柴秀吉書状（8号）



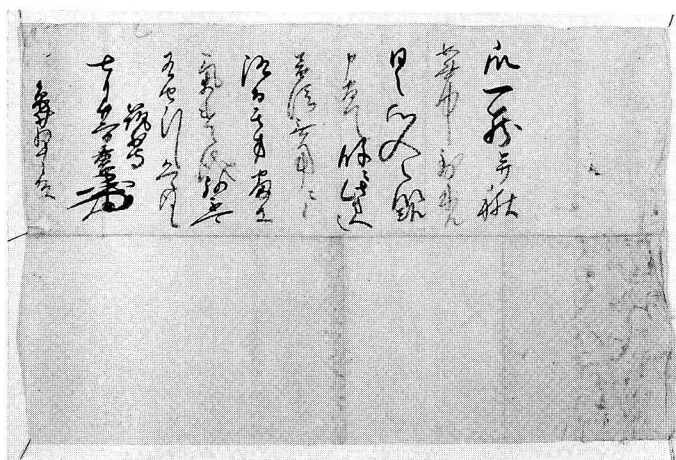
⑫ 羽柴秀吉書状（9号）



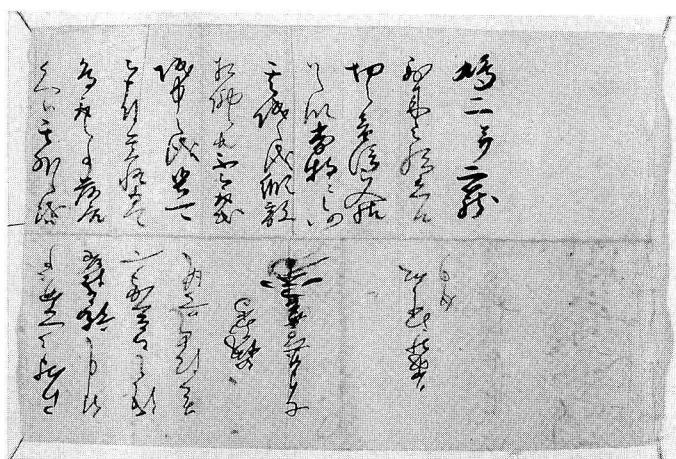
⑬ 羽柴秀吉書状 (10号)



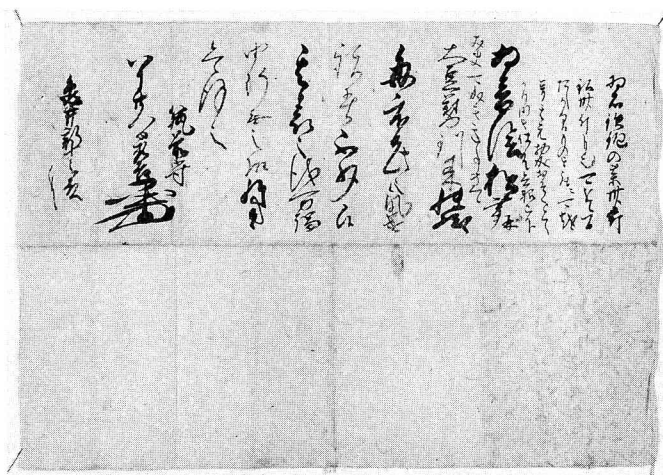
⑭ 羽柴秀吉書状 (12号)



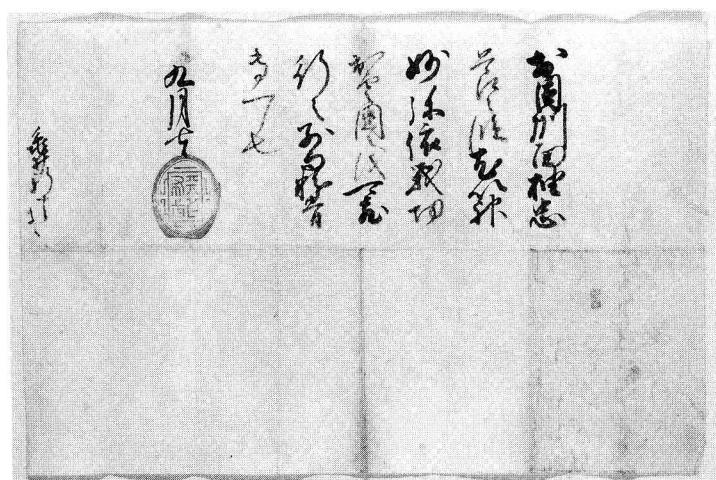
⑮ 羽柴秀吉書状（13号）



⑯ 羽柴秀吉書状（14号）



⑪ 羽柴秀吉書状 (16号)



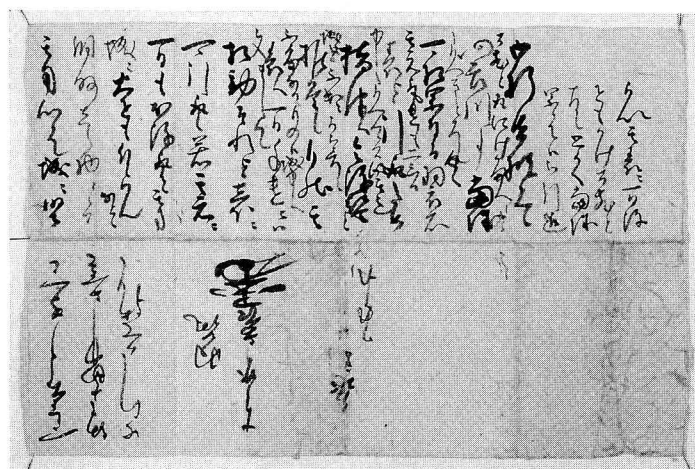
⑫ 織田信長朱印状 (17号)



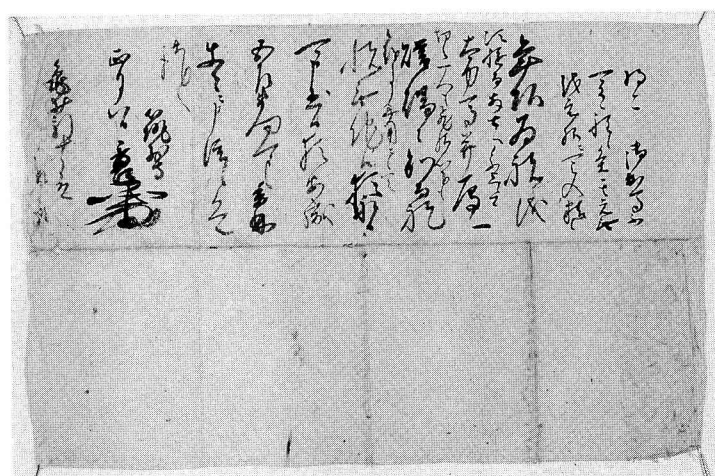
① 羽柴秀吉書状（18号）



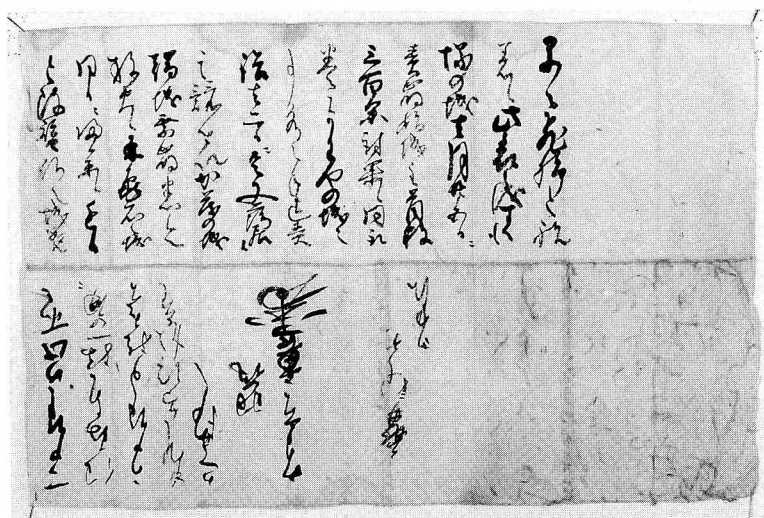
② 羽柴秀吉書状（20号）



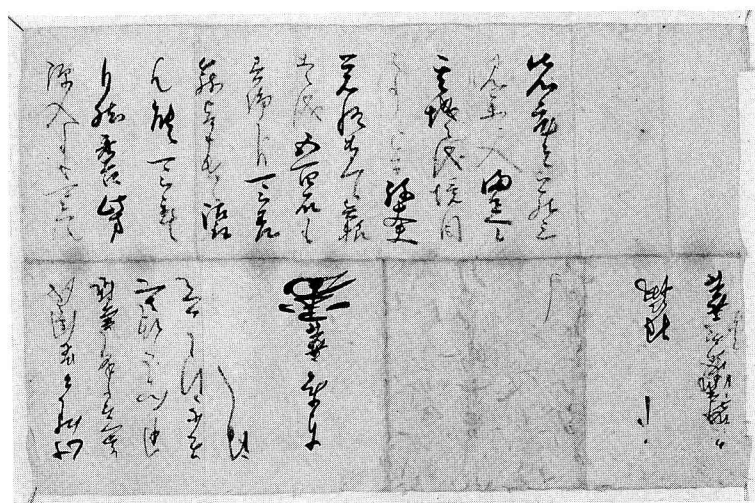
㊦ 羽柴秀吉書状 (21号)



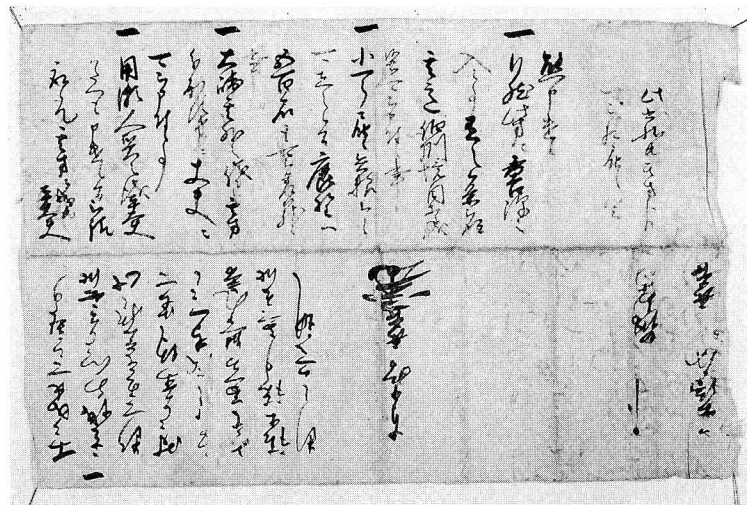
㊦ 羽柴秀吉書状 (25号)



㊤ 羽柴秀吉書状（22号）



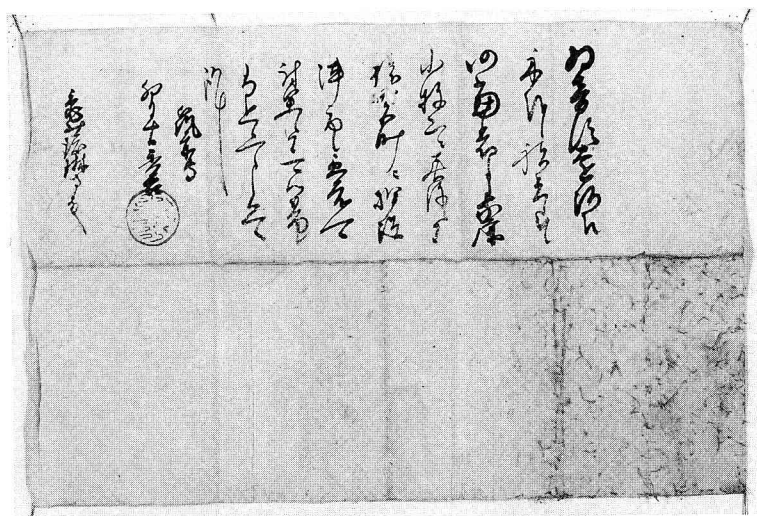
㊦ 羽柴秀吉書状（24号）



㊦ 羽柴秀吉書状 (58号)



㊦ 羽柴秀吉書状 (26号)



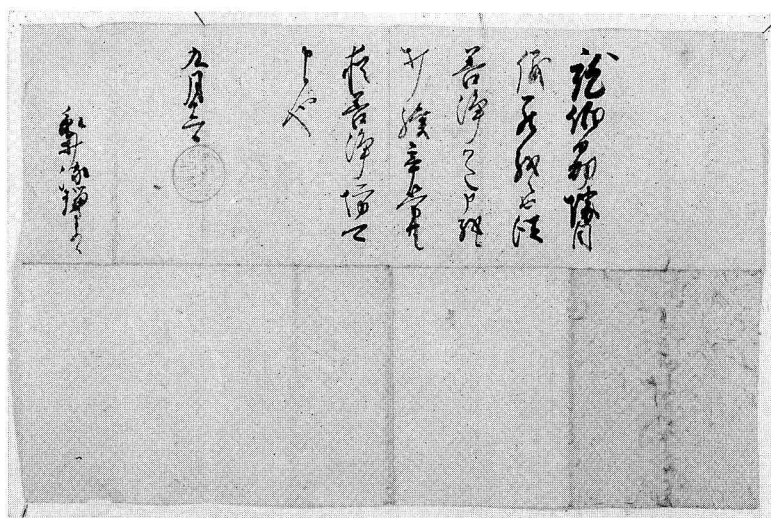
㊦ 羽柴秀吉朱印状（27号）



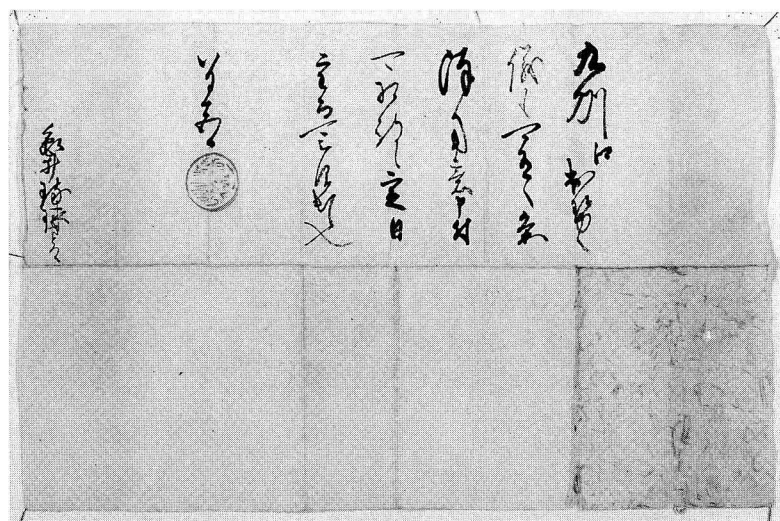
㊧ 羽柴秀吉朱印状（28号）



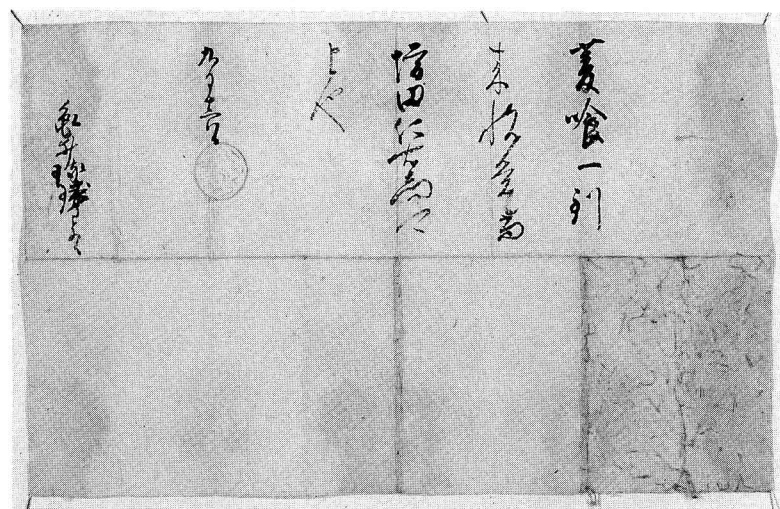
㊟ 羽柴秀吉朱印状 (54—3号)



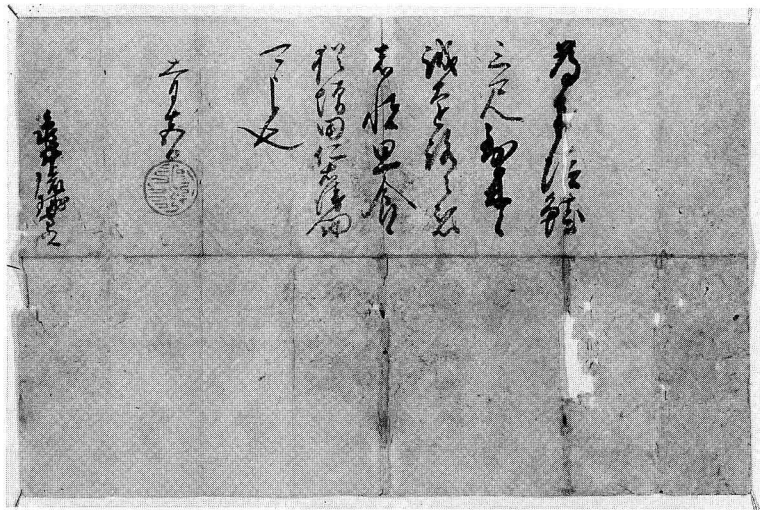
㊟ 羽柴秀吉朱印状 (23号)



㊦ 羽柴秀吉朱印状（29号）



㊧ 羽柴秀吉朱印状（31号）



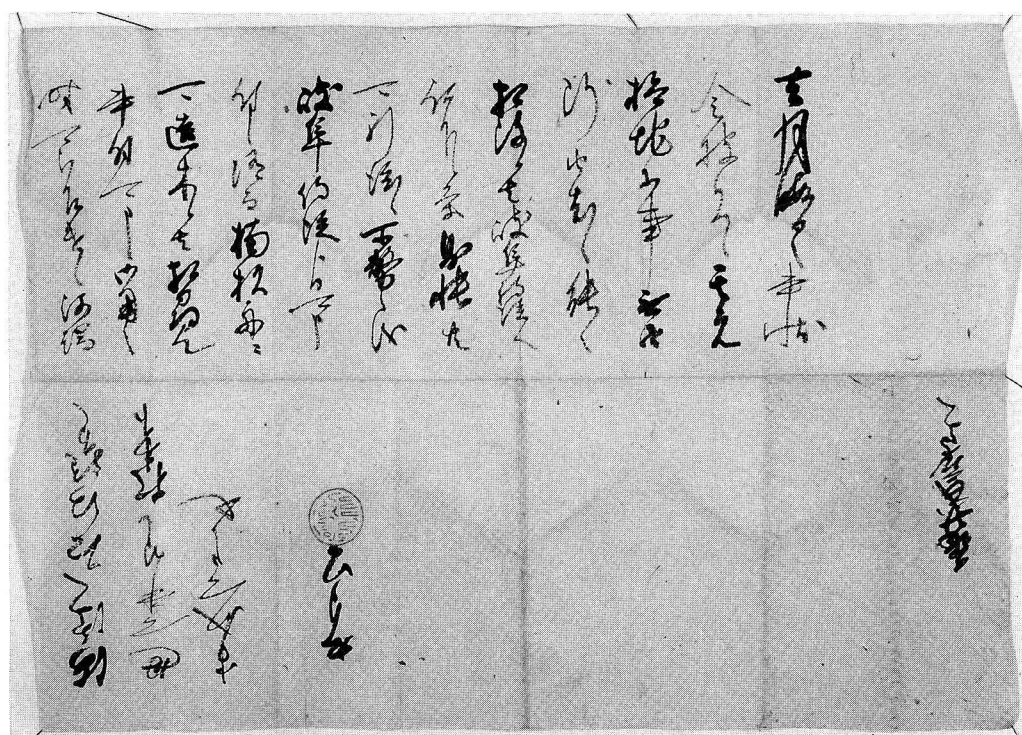
③ 豊臣秀吉朱印状 (32号)



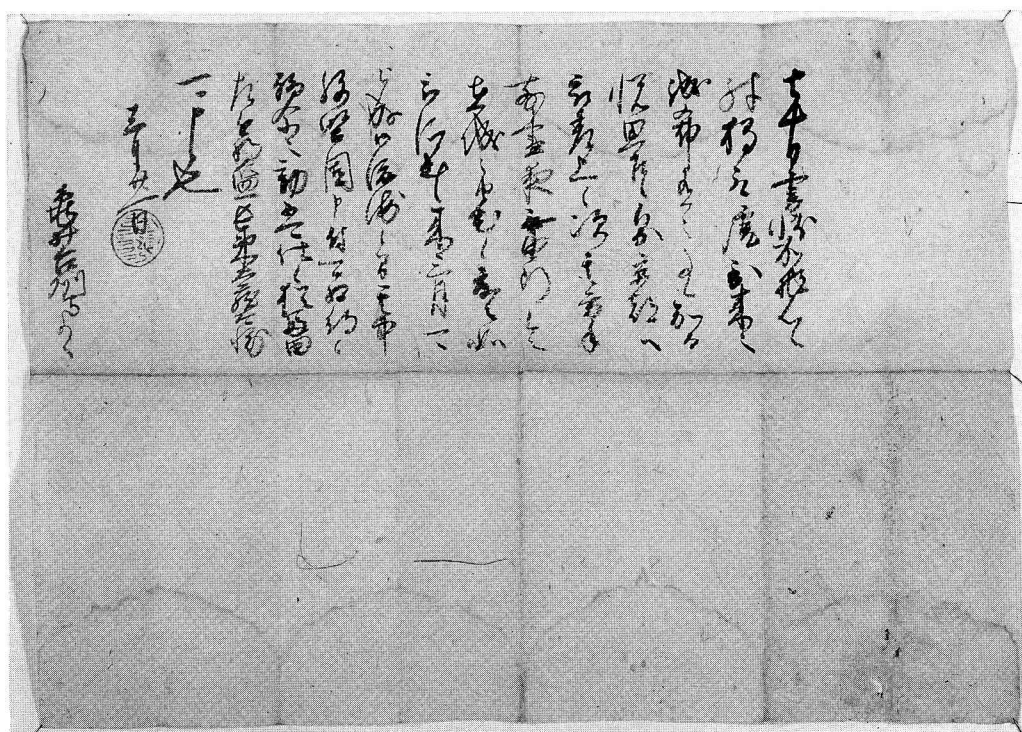
④ 豊臣秀吉朱印状 (33号)



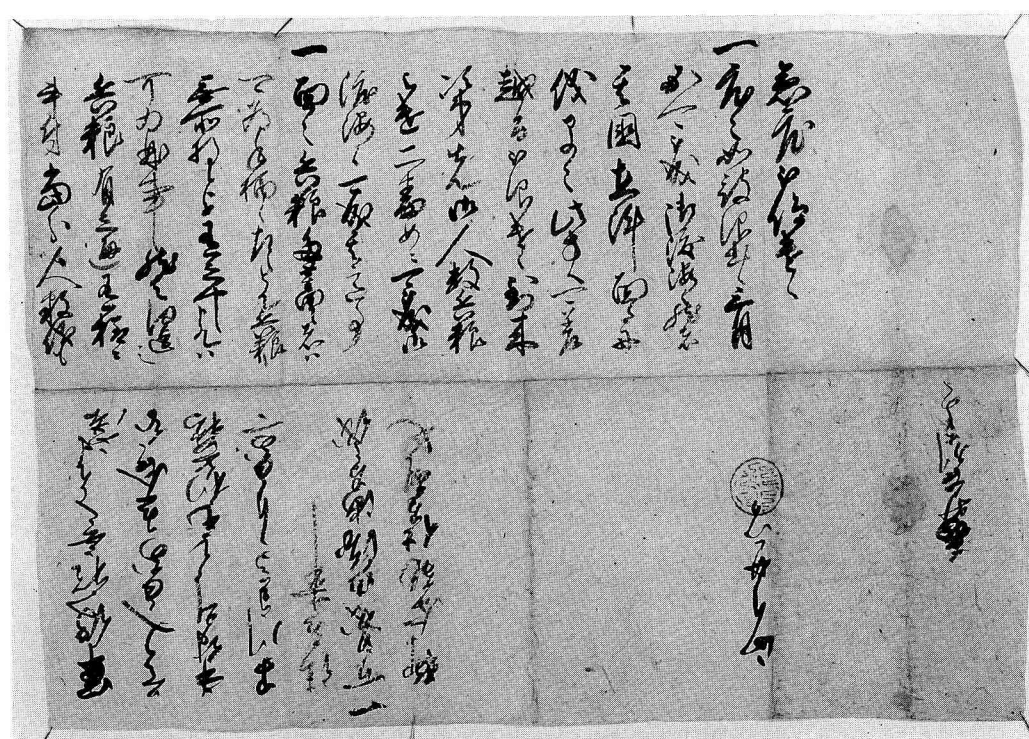
⑤ 豊臣秀吉朱印状（30号）



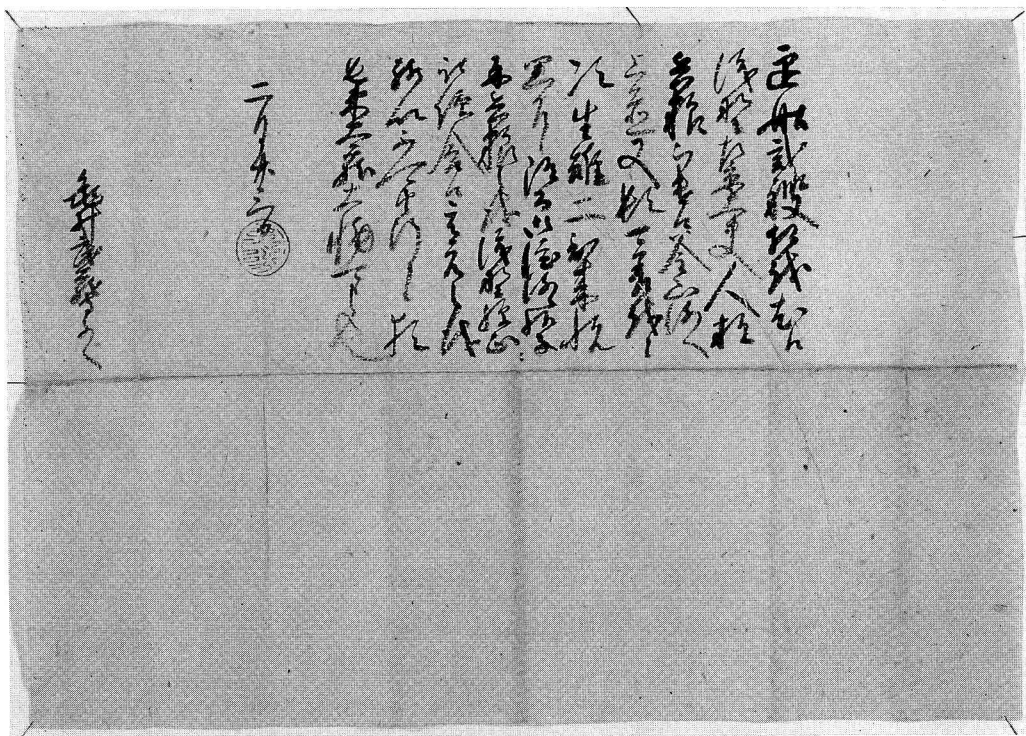
⑥ 豊臣秀吉朱印状（34号）



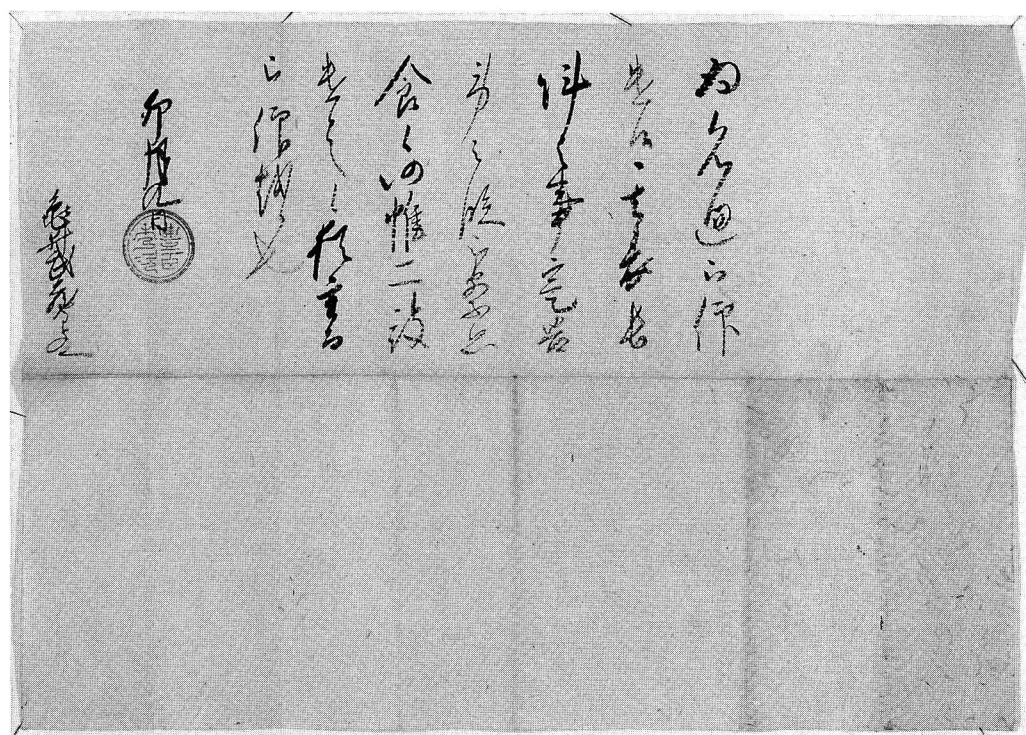
③⑦ 豊臣秀吉朱印状 (35号)



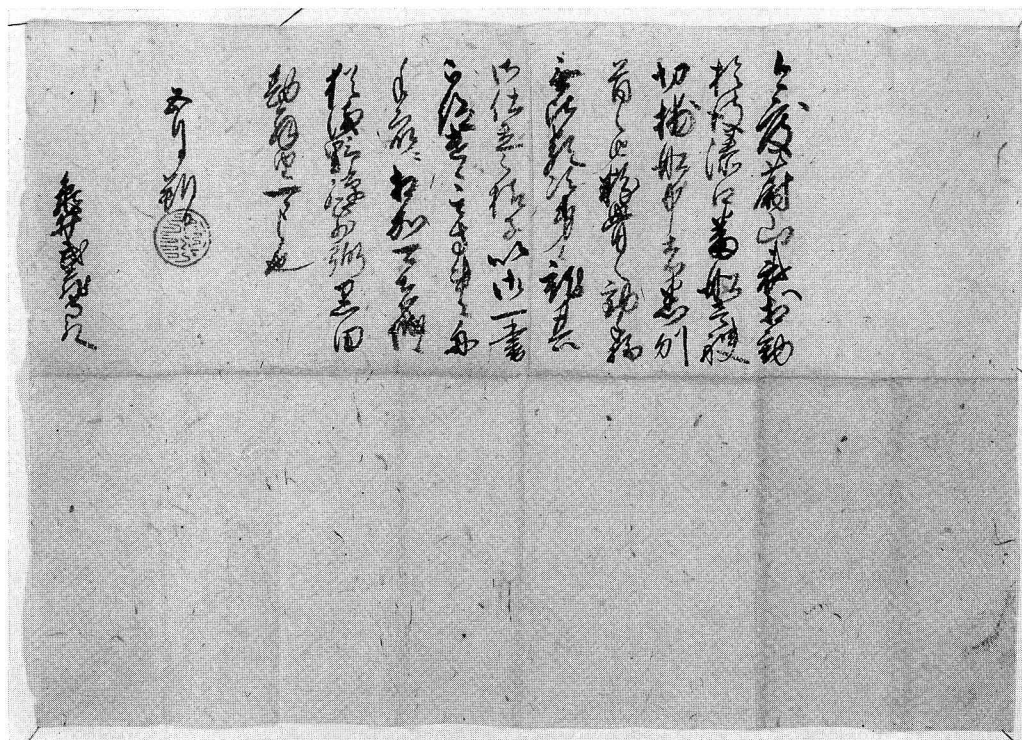
③⑧ 豊臣秀吉朱印状 (37号)



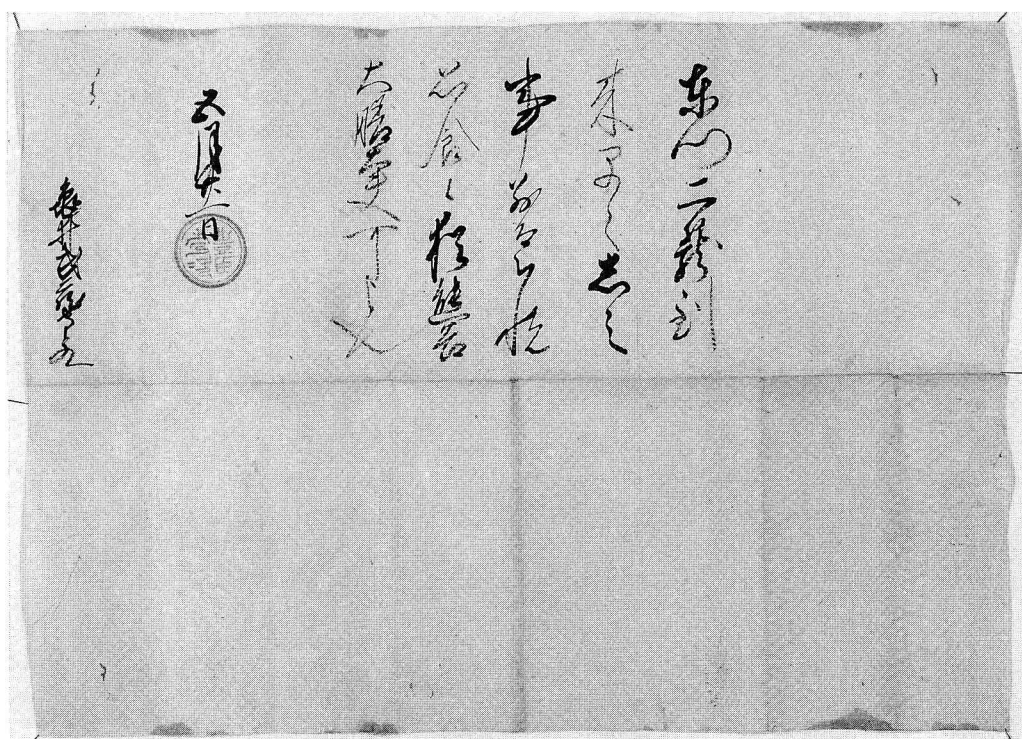
③ 豊臣秀吉朱印状（38号）



④ 豊臣秀次朱印状（41号）



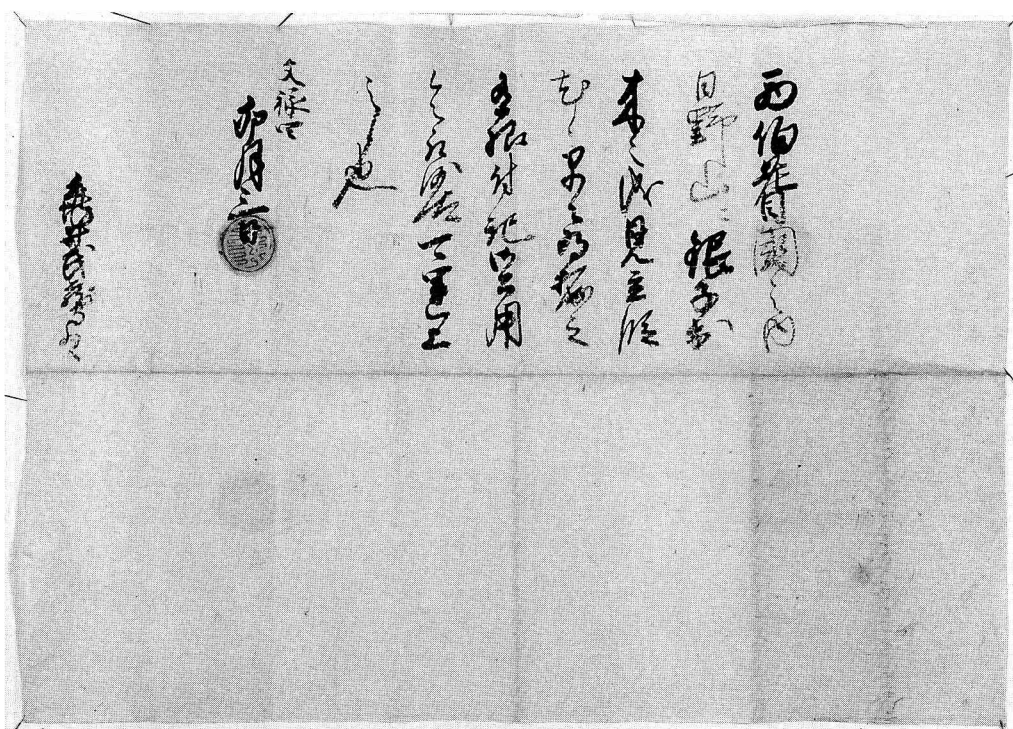
④ 豊臣秀吉朱印状 (36号)



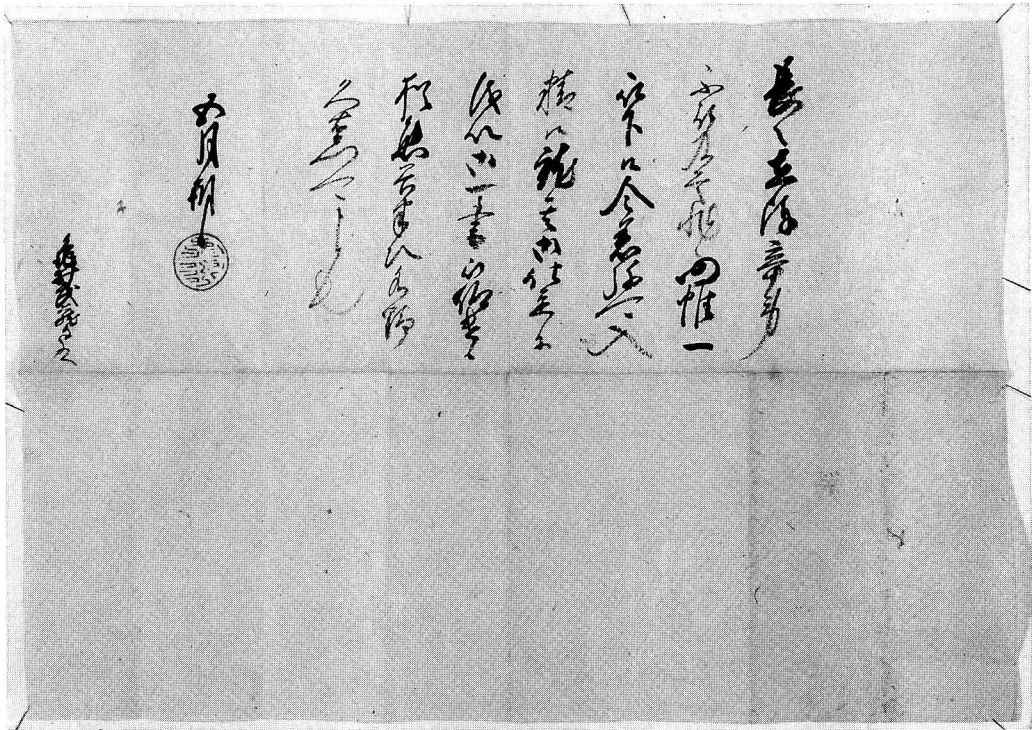
④ 豊臣秀次朱印状 (43号)



④③ 豊臣秀次朱印状（42号）



④④ 豊臣秀吉朱印状（40号）



④ 豊臣秀吉朱印状 (39号)